－文 芸－

草の丘

第 17 号

2019 年 12 月 印旛文学の会

URL http://bungeikusano-oka.raindrop.jp/

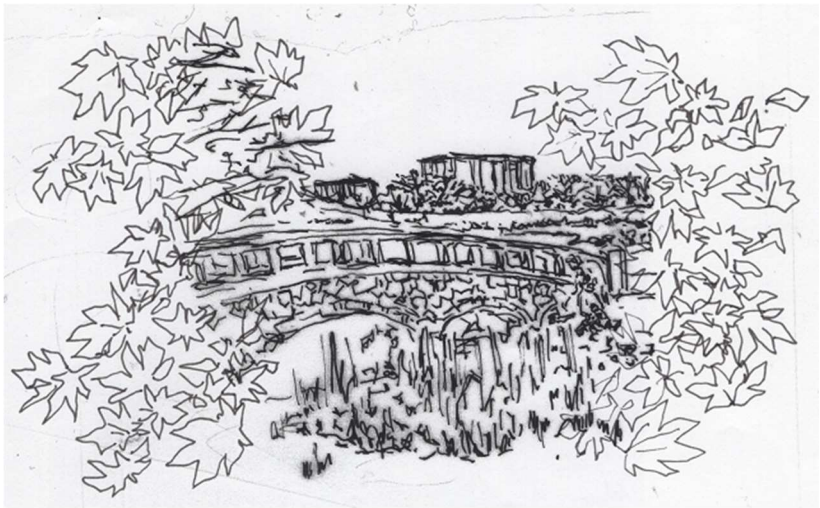
文芸

草の丘　第十七号（二〇一九年　十二月）

目次　草の丘　第十七号

《詩》
暴風雨の果てに　中川　とら……一
《短編》
死線　畑中　康郎……三
《紀行文》
牧水の里紀行
―若山牧水と尾鈴山―　唐瀬　光……三二
《連載》
そよのバアバの空中サロン
―その八　将来の希望―　中川　とら……三六
《書評》
松本清張「遭難」について　畑中　康郎……四三
《連載》
伊能忠敬と四人の妻　香取　淳……四八
《詩》
日女若ほか五編　安達　真魚……八六
《カット》
高橋　より

（中川とら・唐瀬　光のカットは著者による）



暴風雨の果てに

中川とら

受け入れられない感情
かみ合わない人との言葉
求めても、求めても
見つけられない居場所
度重なる試練に
打ちのめされてしまった挫折感

人生も自然も時に容赦なく暴れまわる
世界は静寂と動乱の流転を停止しない

しかし
凄まじい暴風雨の後の
夜空にひろがる満天の星々は
壮大にして、懐かしく 美しい
自分の中から　不思議なほど力強い
希望が湧き上がってくるのを
感じさせてくれる

◇

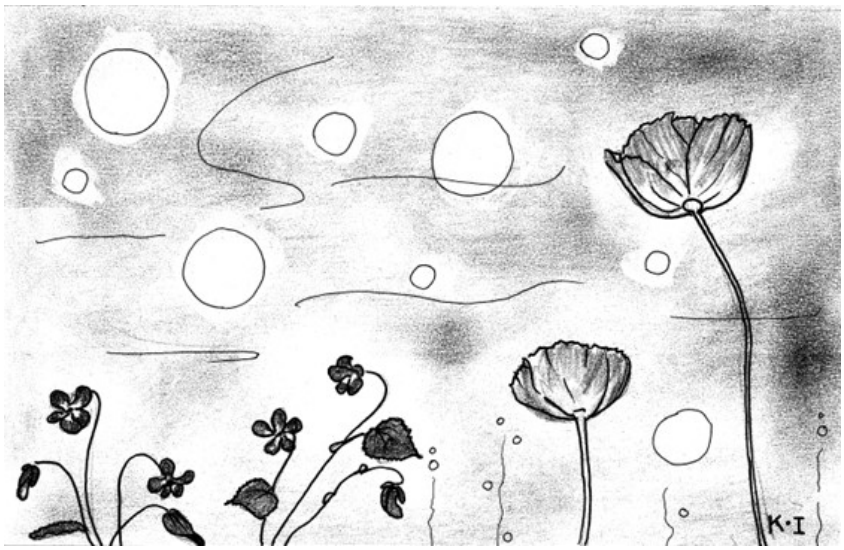
風が止まり
雨がやみ

雲間より差し込む夕日

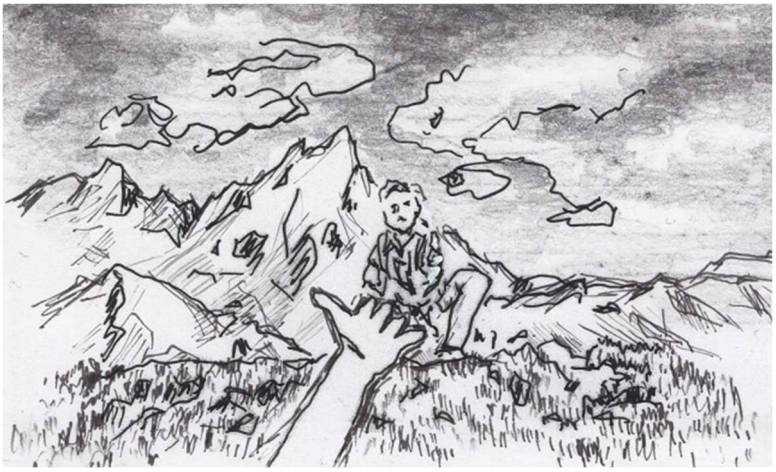
木々の緑が水のしたたりに光り
にわかに七色の虹が空に架かる
鳥が囀りにぎやかに舞い上がれば
人も天を見上げ微笑む

日、落ちる前の美しき刹那は
きょうを賢明に生きた
わたし達を讃え、励ましているのだ

◇



死線



畑中 康郎

（一）

平成二十×年八月。

その頃、佐渡敏夫は公私ともに絶不調だった。精神的に追い詰められ、何をやってもうまくいかなかった。

彼が育った家には両親と二人の姉がいた。姉たちはすでに嫁ぎ二人とも子持ちになっていたが、敏夫の方は三十歳という年齢になっても未だ独立出来ず、親がいなければ生活出来ない状態だった。恥ずかしいことだが、自炊をしたことがない。料理を作ることが出来ないのだ。要はやる気の問題なのだが、彼には自立心がない。身の回りのことを両親に頼ろうとするからこうなる。したがって離れたくても離れられなかったのだ。それで彼は自己嫌悪に陥っていた。

両親にとっては初めての男の子だったし、幼い頃は喘息持ちで体が弱く、とくに母親が何から何まで面倒を見た。そのためか、何か辛いことがあると、些細なことでも母親に甘える少年になった。何でも親がかりだったからそうなるのは必然である。

母親はいつも彼に温かく接し、突き放したことが一度もな

い。自分の頭で考え自分で工夫して対処しなさい、と言われたことが彼には一度もなかった。答えはいつも用意されていた。それは三十歳になっても変わらなかったのだ。とくに母親の方はいちいち指図しては、面倒を見たがった。さすがに今の年齢になって、そんな両親、とくに母親が嫌で早く家を出たかったのだが、優柔不断が災いして家に留まっていた。

長年付き合ってきた彼女との関係にしても順調ではなくなっていた。結婚に踏み切る勇気が持てないのである。特別、理由があるわけではない。結婚したとしても早晩破綻するのではないかといった漠然とした不安が常に彼を圧迫していた。ズルズルと時間ばかりが経ち、煮え切らない態度を嫌った彼女は次第に遠ざかった。最近では何の連絡もなくなっていた。

このような不安や苛立ちがあれば、気持ちは後ろ向きになり、いい仕事など出来るはずもない。失敗はそんな時に起きた。あるとき彼は重大なミスを犯して会社に損害を与え、そのために上司からは疎まれ、同僚からも営業部の厄介者のように見られるようになった。

いじめが始まった。もっとも、その兆しは以前からあった。おとなしいからバカにされ、バカにされても丁寧な対応を変えようせず、また断固たる対応を取らなかったから、ますますバカにされた。

しかし明確ないじめは、やはりあの失敗が契機だった。いじめは連日続くようになった。勿論、体を痛めつける暴力的なことではない。言葉の暴力である。いちいち彼らの吐く言葉が敏夫の心を突き刺すのである。

つい数日前のことだった。その日、敏夫は事情があって営業部で最も遅い出勤となってしまった。同僚の江藤から野次が飛んだ。

「おっ、やっとウチのエースのご出勤だ。お荷物に限って重役出勤だな」

上着を脱ごうとしたときには沢田がいつの間にか背後にやってきて、

「お手伝いしましょう」といって上着を後ろから脱がし、それを北川に投げた。

受け取った北川は、「内ポケットが随分と膨らんでいますね。随分とお金が入っているんですかね」と内ポケットから財布を取り出そうとしている。

「やめてくれ」敏夫が叫ぶと、江藤が薄笑いを浮べた。
「お前さん、いつまで会社にいるんだ？　会社の足を引っ張る奴には早く辞めてほしいんだけどな。みんな迷惑しているんだよ」
　この言葉に我慢強い敏夫もさすがにへこんだ。やはり自分はこの会社には不要な人間だと思った。反発もできずに俯いていると、営業課長の武田が大きな声を出した。
「お前ら、くだらないことを言ってないで、さっさと出かけて注文を取ってこい！」
　機械部品を扱う小さな会社だったから営業課員は敏夫を含む六人だけだった。課長の声に敏夫以外の五人は黙って営業課の部屋を出て行った。敏夫は救われた気がして、「課長、すみません」と言った。
「おい、勘違いするな。俺はお前を助けたわけじゃない。ムダ口が嫌いなだけだ。あの事件は終わったわけじゃないからな。新しい顧客を開拓して早く損失を取り戻せ！」
　上司のこの言葉がまたしても敏夫の心に刺さった。人間関係より会社の利益を優先している。このままでは、小心で責任感の強い敏夫が精神に異常をきたしても不思議はなかった。そうでなくても過去に人生が何度も嫌になり、その度に死にたいと思ったことがある。しかしとても死ぬ勇気がなかった。彼は臆病だった。

（二）

　その日、八月十四日。
　佐渡敏夫は日本百名山のひとつに登った。その日は会社がお盆休みで、ふだんできないことを実行しようと考えたのである。登山などしたこともない。どちらかというと体を動かすことが苦手の方だった。それが急に思い立ったのは、気分転換して嫌な気分を一掃したかったからだ。
　選んだ山は、奥秩父の『両神山』だ。頂上まで行き、その日のうちに十分に下山可能な登山ルートである。もともとウォーキングだけは自信があった。何時間歩いても疲れない持久力もあった。
　数日前のこと。母親に登山計画を告げたときのことだ。
「大丈夫なの？　あんた、登山の経験もないし、まさか危ない山ではないでしょうね？」

心配そうに彼の顔を覗き込んだ。
「あぁ、大丈夫だよ。僕が選んだような山だ。秩父百名山のひとつでね、『両神山』という一日で往復できる程度の山だよ」
彼がそう答えると彼女は安心したようだった。
そのとき、準備した登山用具が、万事に慎重な敏夫らしく以下のようなものだった。
傘、手袋、水筒、多めの着替え、百円ライター、ナイフ、笛、ヘッドライト、レジャーシート、何枚かのビニール袋。それにデジタルカメラといつもの携帯電話。
だが日帰り登山のためか、食料だけは軽く考えた。おにぎり二個とナッツ、それに飴玉七個だけだった。遭難したときのことまで考慮し、笛やヘッドライトまで用意したにもかかわらず、食料だけが不十分だったと後になって悔やんだ。

当日、西武鉄道で池袋から秩父に向かった。そこから『薬師の湯』行きのバスに乗り、終点で今度は『日向大谷』行きのバスに乗り換えた。終点の『日向大谷』バス停から登山口までは、徒歩で五分足らずの距離だった。
登山開始は午前十時。その日は快晴で気持ちのいい風が吹いていた。肌に心地よく、途中、目に入る山の花々や木々の緑、それに鳥の鳴き声は絶好の気分転換になった。気に入った景色を何枚か、デジタルカメラに収めた。
往路は何の問題もなく順調で、三時間半で頂上に到着した。頂上には、アカヤシオが群生しており、鮮やかな赤が印象的だった。それにしても頂上からの景色は絶景である。それはパノラマで、遠く『浅間山』や『八ヶ岳』それに奥秩父の山々が見渡せた。美しい稜線が霞んで見える。空気も清涼で、最高の気分だった。その中で取る食事もまた格別である。簡単な食事だったが、本当においしく感じた。
しばらく頭の中には何もなかった。いつもの悩みが浮かぶことはなかったのである。無心の状態もたまには必要だなと考えた。ところが、そう考えた瞬間、忽ち、頭の中に日常が舞い戻った。無の状態でいることは本当に難しい。嫌でも頭に蘇ってしまうのである。一番に思ったことは、やはり仕事で失敗したことだった。
問題のあったその日、お客様からの電話注文が業務終了後に掛ってきた。受けた彼にツキがなかったのだろう。原材料を扱う資材部門はすでにいない。そのため翌日の処理にな

らざるを得ず、注文伝票を机の中に入れたままで帰宅した。ところが、翌日に問題が起きた。出勤早々からクレーム処理で外出する用事が出来たのだ。日頃からクレームの多い顧客だった。顧客だからつまらないことでも対応しなければならない。手を抜けばクレームは拡大する。丁寧に対応したため、その処理に一日かかった。そしてそのまま注文伝票のことをすっかり忘れた。

注文は非常に重要なものだった。先様では注文した部品が翌々日に届かなければ、それを使って組み立てる製造ラインがストップしてしまうのである。先様の損失は数千万円に上り、小さな彼の会社の賠償額として甚大だった。社内で問題にならないはずがなかった。敏夫の責任を問う声も出た。しかし重大な過失ではあるが、故意ではないと認められて幸いなことに処分保留となった。だが、トラブルの報告は社長まで上がり、敏夫に代わって直属の営業部門長が厳重注意処分を受けた。

以後、敏夫に注がれる目は厳しいものに変わり、課長を通じてではあるが、毎日の業務内容を詳細に部門長に報告する羽目になった。信用されないことは大変な精神的苦痛である。自信も失った。一時は会社を辞めたいと思った。しかし辞めたところで今以上の会社に就職できる自信もない。仕方なく、日々耐え忍ばなければならなかった。

次に浮かんだのが恋人の明子のことだ。

明子とは会社に近い大衆食堂で昼食時間によく顔を合わせた。何となく気になって声をかけた。自分でも驚くくらいに自然に声が出た。

「近くの会社の方ですか？」

「ええ、そうなんです。あのビルの会社です」

彼女は明るい声で答え、後方の広い道路を挟んだ向かいのビルの一角を指差した。

「会社が小さいものですから社員食堂がなくて、お弁当を作らないときにはよくここに来ます」

笑顔が素敵だったし、丁寧な受け答えだったので好感を持った。再び顔を合わせたとき、自分でも驚いたのだが、その晩のデートに誘っていた。関係が進むときは何の苦労もないようだ。その晩、たまたま時間が空いていたらしく、明子はすんなり承諾した。以来、昼間の食堂は避けて週に一回は食事や映画などで一緒に過すようになった。

明子は素直な性格でクセがなかった。明るかったし気持ちが優しい。次第にこの人だったら、一緒に暮らしてもいいかな、と思うようになった。そんな関係が一年以上は続いた後だった。仕事で失敗し、絶不調に陥っていたころのある晩、明子の様子がいつもと違っていた。表情に柔らかさがないのである。真剣な様子で言った。

「敏夫さん、わたしたちいつまでこんな関係を続けるの？」

敏夫にはどうしてそんなことを明子が言うのかわからなかった。首を傾げていると、

「わたしね、いつもただ会って、二人でいて、それだけで家に帰るでしょう。こんなこともう嫌なの。変化がないし」

敏夫は意外だった。いつも楽しそうにしているじゃないか。これまで一度だってつまらないと彼女は言ったことがない。だから、今更何が不満なのかわからない。

「わからないな。つまらなかったらはっきりと何がつまらないのか言ってよ」

「じゃ、はっきり言うわ。わたしってあなたの何なの？」

敏夫にはまだわからない。

「お付き合いしてから一年以上が経つけど、一度だってあなたから手さえも握られたことがないわ。これが恋人関係って言えるの？」

「何だ。そんなことか」

「何だ、そんなことかって、大切なことよ」

明子は初めて口を尖らせた。敏夫は男女間のこんな当たり前のことがわからないでいたのだ。女性だって感情もあれば肉体もある。それで、何となく気まずい雰囲気になってその晩は分かれた。

しかし次に会った時も敏夫は明子の手を握らなかった。そのことで彼自身分かったのだが、それ以上に進展すると結婚しなければならない、という妙な強迫観念のようなものが彼にはあったのだ。その次もまたその次も敏夫は明子の手を握らなかった。勇気が出ないのだ。

明子は次第に以前ほどの情熱がなくなってきた。折角いい人に巡り会えたという思いが、自分の勘違いではなかったかという思いに変化してきた。敏夫の方もずっと続いてきた一緒にいて楽しい思いも将来結婚してもいいなというかすかな思いも次第に薄れてきた。彼女の発言以来、二人の間には気まずい思いが流れ、以前のような状況には戻れなかった。

彼女のことも自分のことも信じ切ることが出来なくなったのである。信じ切れないから結婚に向けて足を前に踏み出すことはなかった。

さらには両親との関係で露呈する自分の甘さをどうしたらいいか、悩みは尽きなかった。山には登ったが、結局、日常から離れられない自分を再発見しただけだった。

彼は美しい景色を見ても、おいしく食事を取りながらも、生きる上で必然的につきまとうストレスからやはり何も解放されなかったのである。山頂の清々しい空気の中に自分を置き、そこから見渡せる絶景に浸ればすべてが一新できると考えたのは、結局、思い違いだった。

瞬く間に午後二時になってしまった。『薬師の湯』行きの最終バス発車時刻が午後六時だったから、そろそろ下山を開始しなければならない。往路では、頂上まで三時間半を要したから、下山はもう少し短い時間になるだろうと考えた。今出発すれば楽だ。

下山は順調だった。三十分が経った頃、ルートが二つに枝分かれしている場所に出た。ひとつは、『清滝小屋　日向大谷六キロ』。つまり朝方上ってきた道だ。だが、もうひとつの方は、『日向大谷　七滝沢経由　五キロ』と案内板にあり距離は若干短い。どちらのルートでも『日向大谷』にはほぼ時間通りに戻れる。

どちらのルートを選ぶか瞬時迷ったが、そのとき彼の頭に浮かんだことは、たまにはいつもと違うことをやってみたいという思いだった。同じことを繰り返して安全を感じる自分が、正直、嫌になっていた。小心者が陥る安全重視で冒険のない人生が嫌になったと言った方がいいだろう。

今回の登山の目的のひとつは、こうした日常を打破することにあると思った。結論として、上りとは異なるルートで下山することにした。すると清々しさを覚えたから不思議だ。

三十分ほどかけてその道を下りたとき、似たような景色が二手に分かれている場所に出た。そこには道標がなく早くも迷ったが、どちらの道を行っても大差はないだろうと簡単に考えた。彼は右側の道を選んだ。理由はない。カンのようなものだ。もし先に行って、道らしい道がなかったらこれから暗くなるし不安でもある。しかしその場合は引き返せばよい。当初考えた時間より少し遅れるにしてもバスの発車時刻に

は十分間に合う。仮に最終バスに乗り遅れたところで、明日も会社は休みだから、地元の民宿にでも泊まればよいと簡単に考えた。彼には重大な局面でよく考えず、安易な楽観に陥る傾向があった。そのことに気付いたのはずっと後のことだ。

そのまま進んだ。やはり、案の定、迷った。しかし引き返すことをしなかった。一度決めたことを徹底し、意地でも自分の意思で動きたかった。過去の自分に反発したくなり、元の道に戻りたくなかったのだ。

途中、比較的大きな石が目に入った。腰掛けられるほどの大きな石だ。この石を目印にしようと思った。それからは時間を意識したのか、焦って足取りが早くなった。大小の岩が点在する難しそうな道になり、さらに進むと道が狭まった。嫌な予感がして弱気になった。戻る方がいいと判断した。例の石が目印になるはずだった。

戻り始めた。が、不思議なことにいくら歩いてもあの大きな石が出てこない。考えた以上に長い距離をすでに歩いていたのだろうか。胸はドキドキと高鳴り、胃が鉛を呑んだように重くなった。足取りはますます早くなった。

そのときだった。傾斜がやや急で、砂利と岩石が多い場所に足を踏み入れてしまった。そこが雨水を吸って滑りやすくなっていた。彼は足を滑らせた。

「アーッ！」

叫び声を上げながら、かなりのスピードで切り立った崖を約四十メートル滑落し沢の付近まで落ちてしまった。不幸中の幸いは、足から滑落したことだった。もし前のめりであったなら、頭を打って即死したに違いなかった。だが、足からの滑落とは言っても、木々の根っこや大小の岩に体じゅうをぶつけ、加速度がついていたから、かなりの衝撃が体全体にかかったはずだ。ところが理解できないことに、その時点では体のどこにも痛みを感じなかった。

まず確認したことは怪我の有無だった。重篤な怪我は遭難につながる。それで頭から足のつま先まで手で触りながらチェックしていった。左足首をチェックするまでは無事を確認できた。それが、左足首を見たときに凄まじいショックが彼を襲った。左足首がブラブラと百八十度、自由に動く感触なのだ。明らかに骨折だった。

骨折に気づいた瞬間、猛烈な痛みが襲ってきた。痛みは脳が認識して初めて感じるものらしい。その怪我を大げさに表

現すれば、左足首が脛部分から皮一枚でつながっている感じなのだ。脛の骨が肉を突き破り、白く突き出ている。そしてその骨の先に足首がぶら下がっているような感じだった。脂が乗って光り、異様に白い。それは奇妙な感覚だった。骨付きのままで店先にぶら下げられた、豚の足を連想させたのだ。しかも酷い出血である。

「ウワーッ！」

彼は再び大きな叫び声を上げた。あまりに酷い光景だった。それとともに、激痛が倍増し、脳神経をさらに刺激した。

これは大変なことになったと思った。遭難したかもしれない、という素朴な恐怖が襲い始めた。そして次に浮かんだことは、ここで死んでしまうのかという静かな恐怖だった。

狼狽するとますます混乱し、現状認識が難しくなる。そこで彼は自分に言い聞かせた。『落ち着け、落ち着け』。

暫らくは何も考えないようにした。それから、ゆっくりとその日の行動を思い起した。すると愕然となった。意外なことに、今日は誰にも会っていなかったのだ。人気のある山だから、ふつう他の登山者と会わないことはないはずだ。ところが誰とも会っていなかった。不思議だった。ということは、現在この山中にいるのは自分だけかもしれない。思った瞬間、途轍もない恐怖となった。独りでいることの恐さだった。自分を助けてくれる人間が周囲に誰もいないということなのだ。死を目の前の現実として捉えた瞬間、再び激しい恐怖が襲ってきた。体がブルブルと震え出した。

勿論、まだ死にたくはなかった。かつて何度も死にたいと思ったのは、単に頭で考えただけのことだ。死と縁遠かったため、精神の余裕が導き出した幻想に過ぎなかったのだ。

ところが今度は幻想ではない。死と完全に直面している。まだ三十歳という若さなのに死が向こうから勝手に接近してきたのだ。今までの人生、勿論、大事を成していない。悔いのない生き方をしてきたとは到底思えない。当然だが、人生にやり残したことが多すぎた。絶望感が体中を駆け巡り、叫び出したい衝動にかられた。

そこで堪えた。努めて冷静になろうとした。十数分が経ったとき、混乱した状態からやや冷静を取り戻した。

そしてやっと重要なことを思い出した。

『そうだ、リュックの中に携帯電話があったはずだ』

ワラにも縋る思いでリュックの中に手を伸ばした。幸いな

ことに携帯電話は滑落に耐えて無傷だった。これで連絡が取れれば、翌日以降には捜索隊に発見してもらえる。神仏に縋る思いで、まず母親の短縮番号にカーソルを合わせ指で触れた。

ところが、よかったと思ったのは早計だった。携帯電話は使用不能状態だった。電波塔のない秩父の山中で携帯電話が使えるはずもなかったのだ。

どうしても冷静にならなければならなかった。現状分析をして次の取るべき行動を決めなければならなかった。そこで気付いた。まずは骨折した左足首の治療が先決ということだ。持ってきた傘を壊し、傘の骨を添え木の代わりにし、持ってきた下着を裂いて固定した。出血と激痛は続いている。激痛はどうにか我慢できるが、出血は放置すると命を失うことになるからどうしても止血しなければならない。

そのとき、彼は自分が意外と冷静であることに驚いた。それから、ふと何年か前に観た、『ランボー　怒りのアフガン』という映画を思い出した。確か、そのとき主人公ランボーは止血のために傷口を火で焼いていた。それを真似ようと思ったのだ。

焚火を起こす必要があった。彼は激痛の続く左足を庇いながら、滑落した斜面を這い上がり、適当な枯れ枝や枯れ葉を集めた。枯れ枝を束ね、枯れ葉とともに百円ライターで火を点けた。焚火は容易に燃え上がった。持ってきたナイフをその火で熱し、十分加熱したところで覚悟してそれを左足の傷口に当てた。

「ギャーッ！」

凄まじい痛みが襲ってきた。有り得ないことだが、少しでも大きな声を出せば痛みが和らぐだろうと考え何度も叫び声を上げた。絶叫は静まりかえった山中に続けて反響した。そのとき、彼は自分が意外と強い人間ではないかと思った。しかしそれは生への強い願望がそうさせたに違いなかった。

その痛みをどう表現すべきか、適当な言葉が見つからない。この世で経験する、あらゆる痛みより激しいものに思えた。骨折の痛みと肉が焼ける痛みが一緒になって、脳天を突き抜けた。麻酔のない時代の手術はこうした過酷なものだったろう。気を失わなかったのが不思議なくらいだ。

甘やかされて育った幼少期、ちょっとした痛みにも大げさに両親に訴え、優しい言葉をかけてもらわなければ泣き止ま

ない、過去の甘ったれた自分が思い起こされた。それに比べ、今置かれている現実はどうだ？　この大きな落差は一体どういうことなのか？

荒療治で一応出血は止まった。勿論、凄まじい痛みは続いている。傷口は、それこそ風が当たるだけでも痛んだから、ビニール袋で左足首全体を覆って風よけにした。多少は痛みが和らいだように感じた。不思議なことだが、時間の経過とともにそうした痛みにも人間は慣れるものらしい。人間がどんな環境でも生きて行けるというのはあながち嘘ではなかった。

（三）

六十代半ばにさしかかっていた、佐渡重幸・冴子夫妻は一人息子の帰宅が遅いことに気をもんでいた。敏夫が秩父の山に登り、何の連絡もないまま帰宅していない。帰宅は午後八時の予定だった。それがもう午後の十時だ。しかも今回に限って何の連絡もない。

少し頼りない息子だったが、真面目で冴子の言うことはよく守ったから、彼女の心配は極限に達していた。三人姉弟の末っ子で目に入れても痛くなかった。喘息を患い、普通の子供よりもひ弱だったから、夫妻は慈しんで大切に育てた。

息子に登山の経験はなかったが、日帰りが可能な簡単な山というので納得して送り出した。それなのにどうしたことだろう？　胃に痛みを感じ出した午後九時ころになって、冴子は頻繁に敏夫の携帯に電話をした。しかし、『電波が届かないところにおられるか、電源が入っておりません』というアナウンスが帰って来るだけだった。

重幸は、「大丈夫だよ。明日になれば、普通に帰って来るさ」と表面上、気楽なことを言っている。本心は深刻な思いなのだろうが、顔に出さない。一方の冴子はイライラが高じていた。

「何を呑気なことを言っているの！　どうしたらいいか考えなさいよ」

しかし焦ったところでどうにもならない。親として何とかしなければならないのだが、何をどうしたらいいのかわからない。今すぐにでも捜索願を出したいのだが、夫の言うようにもしもひょっこり帰ってきたら、世間を騒がすだけだ。冴

子はもう少し待つことにした。その間にも、時間はどんどん過ぎて行く。

夫婦の会話も弾まなかった。テレビを見ても上の空。嫁いだ娘たちに電話して相談でもしようかと考えたが、心配させるだけだからこれも止めた。玄関の方ばかりを見ているが、何の変化もなかった。とうとう午前一時になった。その時点で我慢ができなくなり、地元秩父の警察署に電話した。第一声はこんな感じだった。声が震えている。

「あのー、息子が帰ってこないんです。どうしたらいいでしょう?」

相手の警察官と思しき人物は扱いに慣れているのか、落ち着いたものだった。

「帰ってこないって、どこに出かけたんですか?」

そこで、やっと冴子は自分が間の抜けたことを言ったことに気づいた。

「息子が秩父の山に出かけて帰ってこないんです」

時刻は午前一時を回っていたから、異常事態には違いなかった。

「それで、秩父の山といっても、具体的に何という山ですか?」

そこで冴子ははっとした。確か、敏夫は山の名前を言っていたはずだ。だがその名前は彼女の頭から抜け落ちていた。百名山とだけ記憶している。しかし奥秩父には百名山がいくつかあって、ネットで調べてみると『雲取山』『両神山』『甲武信岳』が該当した。それらのうちのどれかひとつに違いないと言った。すると警察官は困ったように

「あなたねぇ、申し訳ないけど、三山合わせると途轍もない広さになるんですよ。三十平方キロメートルはあるでしょうかね。例えてみれば、東京ドーム六百個分の広さですよ。そこから、人ひとりを捜すなんてことは、巨大なワラの山から針一本を捜すのと同じですよ」と言った。

冴子は愕然とした。自分の責任だと思った。しっかりと、敏夫の言った山の名前を憶えていたら、今すぐにでも捜索隊は手がかりを得て息子を救助してくれるはずだった。それなのに忘れてしまった。彼女の胸は激しく痛んだ。

「いや、とにかく我々もできることは何でもします。山岳救助隊に連絡し、取り敢えず明日にでも登山ポストを見させますよ」

登山ポストとは、登山者が入山するときに、その入り口に登山計画を記入して投函するものだ。もしもそこに投函されていれば、捜索は容易になり早目の救助が可能になる。冴子はそこに期待をかけた。翌朝になれば、すぐにでも救助隊は動いてくれるに違いなかった。冴子と重幸は一睡もできずに夜明けを迎えた。

翌朝、救助隊は三方に分かれて三山の登山ポストを当たった。ポストのどこかに登山計画が入っていれば、遭難箇所を特定しやすくなる。ところが、隊員からもたらされた報告はどれも失望させられるものばかりだった。どのポストにも投函されていなかったのである。

隊員は想像した。おそらく、佐渡敏夫は日帰りの気安さから登山計画を大げさなものと考えたに違いない。登山経験の少ない人には結構こういう人が多い。そうであれば、地道に人数を動員して三山を虱潰しに捜すしか方法がなかった。

翌日の午後になって、登山ポストから手がかりが得られなかったと知った冴子は、いよいよ自分たち自身が動かなければならないと決心した。何から始めたらいいのか考えて達した結論が、地元警察と連携を図りながら、三山の登山口に最も近い電車の駅、さらにはバス停の周辺でビラを配ることだった。

『捜しています』とタイトルを付け、敏夫の全身を写した写真をビラに焼き付けることにした。翌々日の早い時間には、長女の夫がパソコンで二千枚作ってくれた。仕事をする心境ではなかったらしく、真っ先に駆けつけて協力してくれた。

刷ったビラは自分たち夫婦や二組の姉夫婦、それに敏夫の恋人明子の計七人で時間の許す限り配り続けた。少しでも関心を持ってもらいたかったから道行く人々に大声で呼びかけた。しかし人々はこちらが期待するほど関心を示さなかった。ビラに一瞥はくれるものの足早に去って行った。『捜しています』の文言では、単なる家出人と間違われたのかもしれない。

ビラを配り始めて三日が過ぎた。心配しながら待つ時間は早かった。言い換えれば、それだけ敏夫の死が確実に近づいているということなのだ。それは戦慄の時間だった。敏夫を絶対に死なすわけにいかない。そう思うと彼らの焦りは次第に大きくなった。

その間も、警察から毎日のように捜索の結果報告が来ていたが、進展はまったくなかった。行方がまったくつかめないのである。遭難から七日が経った頃だった。家族にとって恐怖となる悲観的な知らせが、ついに警察からもたらされた。捜索隊の人数を半分にするというのだ。

「佐渡さん、まことに申し訳ないのですが、ここまで努力させていただいて未だに息子さんの行方はわかりません。これまでの経験では、山での遭難は七日目の段階でかなり厳しい結果になるのがふつうです。したがって、ご家族の皆様には情け容赦のないことではありますが、捜索隊の人数を削減させていただきます」

いよいよ、来るべき時が来たと重幸は覚悟を決めた。何が悪かったのか、育て方の何が悪かったのか、ともかくここまで来た以上、最悪を覚悟しなければならなかった。

ところが、冴子はあくまで強気だった。あの子に限って、このまま死んでしまうことはあり得ない。きっと頑張ってどこかで生きている、と言った。それは腹を痛めたわが子に対する、母親としての本能であったかもしれない。

捜索隊が解散しても、自分が独りだけになっても捜すと言い張った。半ば諦めた重幸もその勢いに圧倒され、再び元気を奮い起こした。夫婦はまたしても奥秩父百名山の麓にある駅周辺に出かけて行った。

一方、敏夫の同僚たちはお盆休暇が明けた八月十六日、出勤してこない敏夫を訝った。

江藤、沢田、北川たちには、多少の後悔があった。自分たちのいじめが原因で出勤拒否になったと思ったのである。しかしさらに翌日の十七日になっても敏夫は出勤してこなかった。昨日の段階で家族から連絡があってしかるべきなのにそれもなかった。敏夫の両親には彼の会社のことなどどうでもよかった。敏夫のことだけが心配だった。

ついに課長の武田が夜遅く、自宅に連絡を入れた。わかったことは、十四日に登山に出かけてまだ帰宅していないというのである。遭難が考えられた。

（四）

敏夫は元来考えることが好きだった。異常状態に置かれた

今、なおさら様々なことに思いを巡らした。いや、自然に浮かんで来たと表現する方がいい。まず意外だったことは、甘ったれだった自分が自身の意志で生きようとしていることだった。彼は生に対しては淡泊と自分では思っていた。生にしがみつきたくないし、死に直面したらあっさり死にたいと思っていた。少なくとも生に拘泥して見苦しい最期だけは避けたい。それが日本人というものではないか。しかしどうやら自分の場合は違っていた。嫌なことだったが、ひょっとしたら祖父・栄蔵のＤＮＡが自分にも根づいているのではないか、と疑った。

『人間はな、どんな環境でも、それが生き地獄のような過酷な場所でも生きていけるものなんだよ』

父親の重幸が十八歳のとき、たった一度だけ、栄蔵は自分の戦争体験を息子である父に語ったことがある。栄蔵は太平洋戦争の激戦地・ガダルカナル島の数少ない生き残りだった。戦後二十年近くを経過し、日本の戦争を批判する論調が世間で盛んになったとき栄蔵はやっと重い口を開いた。

昭和十七年八月、米豪分断作戦を目的に日本がガダルカナル島に飛行場を完成させたのだが、すぐさまアメリカ軍に占領された。それを奪還すべく、まず、一木清直大佐率いる先遣隊九百名が駆逐艦六隻に分乗して米軍に総攻撃をかけた。しかしあえなく全滅。一木大佐は自決した。これが第一陣。

第二陣として島に送り込まれたのが、川口清健少将率いる川口支隊だった。川口少将は一木支隊の失敗を反省して、テナル川河口以東の地区からジャングル内に潜入迂回し、飛行場南方から敵の背後を奇襲する作戦に出た。この中に一兵卒として栄蔵が参加していた。

総計五千六百名の兵士が深夜、木々の繁茂するジャングルの中、道なき道を月明かりだけを頼りに歩いた。足元の地形がどんなものかわからなかったし、どんな危険が、例えば毒蛇がいるかわからない状況だったから、兵士たちは不安のためか私語を交わし、黙って歩くことができなかった。その上、行軍には必然的に大きな音が伴うから静寂は保てない。

ところが、兵士たちの誰ひとりとして気づかなかったのだが、ジャングルのいたるところに米軍の収音マイクがセットされ、その動きはすべて把握されていた。

そして、飛行場南方に集結したところで兵士たちを待っていたのは、何段にも配置された銃撃兵による一斉射撃だった。

兵士たちは為す術もなく次々に射殺されたのである。

栄蔵は太平洋戦争に始めから懐疑的だった。彼は山本五十六大将がふと漏らした『アメリカの豊富な資源と巨大な軍事力に対し、日本軍は長く戦えない』との発言を偶然何かで耳にしたことがあった。それ以来、日本の戦争に懐疑的になり、アメリカにどうせ勝てるはずもないと考えた。野心に燃えるエリート将校のために自分の大切な命を落としてたまるかと思うようになったのである。

ガタルカナルの戦場に派遣されると知ったとき、何としても生きて帰ると心に誓った。当時、戦死が名誉とされた時代、栄蔵はまったくの異端児だった。

栄蔵はジャングルを歩きながら考えた。アメリカ軍はバカではない。日本軍の数倍も賢い。当時栄蔵の乏しい知識の中で辿り着いた結論は、アメリカに物量で圧倒されているうえに彼らが戦略的に物事を考えることのできる国民だと言うことだった。だからこのままでは絶対に殺られる。敵前逃亡は銃殺刑だったが、このまま飛行場に行けば必ず死ぬことがわかっていた。

故郷に残してきた両親や愛する妻のことが頭に浮かんだ。彼は逃亡に賭けた。自分の人生を国のため、否、天皇陛下のために捧げることなど決して考えなかった。非国民と言われても構わない。家族のために生きようと思った。国家への忠誠とは何か、などという大仰なことはまったく考えなかった。

彼はジャングルを歩きながら、少しずつ隊から離れた。兵士たちは行軍に気を取られ、彼の動きに気づかなかった。大木の陰にとっさに身を隠し、部隊が過ぎ去るのを待った。戦友を裏切っているとは考えなかった。先にどんな苦難が待っていようと構わなかった。とにかく無謀な殺し合いに突き進む日本軍から遠く離れたかったのだ。

こうして栄蔵は逃亡兵となった。が、誰も彼が逃げたとは思っていない。死が日常化している異常状態では、ひとりくらい兵士がいなくなったところで気づく者は誰ひとりいない。その後、行方不明と伝えられ、結局は戦死公報に名が掲載されて出征地へ届くだろう。それでいいと思った。

独りになったとき、食料をどうするかが、次なる喫緊の課題となった。南国のジャングルにはバナナやヤシの実などのフルーツがたわわに実っている。当面、それで生きて行こう。入手が困難ならば、蝉などの昆虫や蛇やトカゲを食べてもい

い。飲料水は南国のスコールが恵んでくれる。
こうして栄蔵は二十日間を生き抜いた。最後は骨と皮ばかりになり、誤って米軍基地近くに呆然自失の状態で現れ、そこで捕虜になった。
ところが、米軍の扱いは思いの外、紳士的だった。水や食料はたっぷりと与えられたし、安眠できるベッドもあった。その代わり、日本軍に関する情報を求められた。いや日本軍というより、日本人の考え方や集団行動の特性などを求められるままに話した。スパイ行為と言われようが何だろうが、彼は生き残るために何でも語った。兵士の命を虫けら程度にしか考えない帝国陸軍を売っても構わないと考えたのだ。
父の重幸からこの話を聞いたとき、敏夫は栄蔵を卑怯な人間だと思った。仲間や祖国を裏切ってまでも生きたいのか、情けない男だと思った。散り際を美しくするのが本来の日本人の魂ではないのか。大義のために死ぬのが男の人生ではないのか。虎は死して皮を残し、人は死して名を残すというではないか。武士道がＤＮＡとして体内に宿っているのが日本人ではないのか。
それなのに、栄蔵は戦友たちを見捨てて自分だけが生き残った。だから敏夫はこれを一族の恥と思い、これまで決して他人に話したことがなかった。
すると次には、母と交わした会話が思い出された。まだ二十歳になったばかりの頃だった。それは、ある夕飯の時で、栄蔵を突然思い出して彼は訊いた。
「オカン、ガダルカナルのジィちゃんの行動をどう思う？」
すると母は何でもないように言った。
「ジィちゃんの行動は正しいよ。死んだらオシマイじゃないか」
「でもさ、人として正しい行動を取らないと後悔するよ。卑怯なことをするとそういう人間として神様に分類されてしまうよ。立派な行動を取れば名が残るし神様からも評価されるんだよ」
「名を残す必要なんてないさ。それにジィちゃんの行動が間違っていると誰が言ったんだい？　死んだらオシマイなんだよ。生きられるだけ生きて、できるだけ楽しい経験をする方がいいんだよ。ついでに他人様のためになることをすればもっといいけどね。そんなこと決まっているじゃないか」
「でもね、オカン。人生の目的や意味を考えたらジィちゃん

の行動は間違っているよ」

「バカだね、あんたは。人生に目的なんかないよ。ホントにそう思っているのかい？　楽しく生きればそれでいいんだよ」

「確か、ショーペンハウアーもオカンと同じことを言っていた。人生に意味や目的なんかない。人間は男女の性的欲望の結果生まれた存在に過ぎず、それ以上でもそれ以下でもないって言うんだ。それを知って、ボクも少しは気持ちが楽になったけどね。でもやっぱり違うと思うんだよな。ヘーゲルはね、人生は明確な目的と意味を持ち、人それぞれの課題を持ってこの世に生まれてくる。そしてそれを如何に達成するかでその人間の価値が決まると言ったんだ」

「何を訳の分からないこと、ゴチャゴチャ言ってるんだよ。早くご飯食べてさっさと自分の部屋にお戻り」

母は面倒になったらしい。傍を見ると、父と二番目の姉は下を向き、ただ黙々と箸を動かしていた。家族の中では口で母に勝てる者はいない。

部屋に戻るとしばらくして父がやって来た。

「オカンが言ってたぞ。敏夫は難しく考えるからどうでもいいことで苦しむし、判断も遅くなるんだって。あまり考えず、もっと気楽に生きる方がいいってな」

「わかっているけど考えないわけにはいかない。人間として生まれた以上、考えることは特権だよ。その特権を放棄するわけにいかない」

「そうか、わかった。お前がそう考えるならそれはそれでいいんじゃないか。自分の信じる道が一番だよ。自分の責任で自由に生きろよ」

それだけ言うと父はすぐに部屋を出て行った。

思いはさらに揺れた。母の言ったことを反芻してみた。

『それじゃ、楽しい経験というのはどういうことなのか。おいしいものを食べ、友人たちと愉快なおしゃべりをし、旅行で温泉に浸かる。良質の音楽を聴き、良質の書物を読む。そういうことか？　それとも多くの人を権力で従え、自分の思うままに操ることなのか？　しかしそれでは自分を権力闘争の中に置くことになる。権力は快感だという。だがこれは人によるだろう。その間、人を陥れることが茶飯になるだろう。それが楽しいことなのか？　日々心安まることのない、闘争の中で魂は幸福か。果たしてそういうことが楽しい経験

なのか。そうではあるまい。権力闘争は空しくて醜い。そんなことより、他人様のために生き、自分の魂が喜ぶことをすること。それが楽しい経験ではないだろうか。いや、きっとそうだ』

それからも彼の頭はめまぐるしく回転した。死に直面して、ますます様々な思いが頭の中を駆け巡った。だが考えを元に戻した。ここでは何よりも生き抜くことを第一に考えねばならない。もしも、今ここで自分が死んでしまえば、両親や二人の姉やその夫たちはどんな悲嘆に暮れるか。明子にしても、多分、悲しむだろう。自分は彼らのためにも生きねばならない。死は安息かもしれない。しかし死ぬことはいつでもできる。生きねばならないと彼は思った。

（五）

遭難して二日目の朝が来た。食料は飴玉がたった二個残っているだけだった。昨日、下山途中に五個を消費していた。こんなことなら、もっと節約すべきだった。が、この災厄を予知できるはずもない。

敏夫はそのとき沢の近くにいた。川の水は傍らを水量豊かに流れており、したがって飲料水の心配はない。しかし水だけではいずれ飢えて死ぬ。

そのときだった。彼自身が今考えても理解できないのだが、滑落した急斜面を一歩一歩、足を引きずりながら今度は上り始めたのだ。勿論、激しい痛みは続いている。斜面を上ってどうするのか考えていた訳ではない。動かないことの方が不安だったからなのか。

だが、動き始めてみると、その一歩一歩が大変な苦痛だった。一歩の前進がこれほど大変だったことは、当然ながらこれまで経験がない。それでも頑張ろうとしていることに、改めて自分でも驚いた。これほどの執念が自分にもあったのだ。いつも簡単に物事を放り出し、投げやりになって諦めてしまう自分。そんな自分が今は信じられないほどの執念の塊になっている。こちらの方が本当の自分だったのではないか。褒めてやりたくなった。

かなり上ったときだった。頭上に少し突き出ている崖が目に入った。それが目の前の視界を塞いで上方が見えなくなっ

た。体力が尽き、そこまでが動ける限界だった。それ以上、一歩も歩けなくなった。うつ伏せになって、そこで休息を取った。

ところが、実はそのとき、崖のすぐ上に救助隊が来ていたのだ。だから、もしもリュックにあった笛を吹いたなら、それでなくても叫び声を上げていたら、簡単に救助されていただろう。あるいは、沢から動かなければ、彼の姿は崖の上から双眼鏡の視界に十分入っていたはずだった。そうして救助からは遠くなってしまった。だが、これが彼に与えられた運命だったのだろう。

今度は沢から離れたことで、水の補給が叶わなくなった。沢で詰めた水筒の水もすでにない。食料も水もなければ、間違いなく死ぬ。すでに一昼夜、彼は飴玉二個以外、何も食べていなかった。飢えが襲ってきたし、今は喉も乾いていた。

だがここで敏夫は、さらなる生への執念を発揮した。死を選択すれば、すぐにでも安心静寂の世界にいけたのに彼はそうしなかった。周辺の木々の葉に付着していた雨水を吸い、渇きを防いだ。食べ物は、戦争中、祖父がトカゲやミミズや昆虫を食べて飢えを凌いだという話を思い出した。地面を掘るとミミズや蟻がたくさん見つかった。本当は火を通してからの方がよかったが、そんな余裕はない。生のままで貪るように食べた。ミミズは何度噛んでも、口の中で動いているようなグニャグニャした感触があった。それで初めは反射的に吐き出した。腹の具合も心配したが、下痢は起きなかった。

ミミズや蟻はとくに味らしい味がしなかった。それでもタンパク質の補充にはなる。それで、ミミズと蟻が主食になった。祖父の話では蝉はナッツの味に近いらしい。だから体が動けば蝉を捕まえたかった。

三日目、猛烈な雨が降った。レジャーシートに包まって凌いだ。雨が止むと、またすぐに焚火をして体を温めた。夏とはいえ、夜の山中は冷える。とにかく体力の温存が必要だった。

そして、その日の午後のことだった。次なる恐怖が敏夫を襲った。骨折した左足首を包んだビニール袋の中で何かが動いている感触があったのだ。激痛から目を背けたために左足首をしばらく見ていなかったが、意識すると確かに何かが動いている。彼は恐る恐る袋を外した。目に入ったものを見て、衝撃と同時に戦慄が走った。

「ウワーッ！」

何と、傷口周辺や飛び出た骨の周辺にビッシリと蛆虫が張り付き、動いていたのだ。腐った肉の臭いを察知したハエが、ビニール袋の隙間から侵入し、知らぬうちに大量の卵を産み付けたらしい。

幼少時から不潔なもの、唾棄すべきもの、見たくない最悪なものと考えてきた蛆虫が、自分の傷ついた皮膚の中で生きている。何とおぞましいことだろう。いっそのこと、もう一度、焼けたナイフで蛆虫どもをやっつけてやろうかと思った。が、衰弱しその気力も今は失われていた。その一方で不思議な感覚も生じた。折角、自分の体の中で生きているのだから、生かしておいてやろう。間もなく自分は死ぬのだから、その代わりに蛆虫どもを生かしてやろうと思ったのだ。人間という奴は、極限状態に陥ると実に妙なことを考えるものだ。

と言って、矛盾した話だが、彼は生きることをまだ諦めてはいなかった。今度も無意識に体が動き出した。再び沢まで必死に下り始めた。最後の体力を振り絞ったのだ。

沢に着くと、リュックから運転免許証と健康保険証を取り出した。そしてそれらをそれぞれ別々のビニール袋に入れ、口をしっかりと縛って沢に流した。誰かが気づいてくれたら、警察か救助隊に連絡してくれるだろう。ひとりのサラリーマンが日帰り登山から戻っていないことは、すでにニュースになっているはずだ。

（六）

それから六日が経った。ということは遭難して九日目だった。その間、何の変化もない。体力は日に日に衰弱の度を深めた。ミミズや蟻ばかりを食べ、飲料は川の水だけ。話す人もいないし、体を動かすこともできない。激痛は続き、睡眠も十分でない。こんなことを毎日続けていれば必然的に衰弱する。考える能力は、次第になくなり、ただボーッとしている時間が長くなった。

何かで読んで記憶していたのだが、山で遭難した人の発見に至るまでの生存確率は、初日こそ、九二・九％、三日目には三四・一％、六日目にはぐっと下がって二〇・〇％、そして七日目以降は〇％。死に直面し頭がクリアになったのか、正確な数値が頭に浮かんだ。つまり敏夫の場合、データでは

すでに死亡していることになる。救助隊には捜索する手がかりがなく、次第に諦めが走り、捜索人数をすでに削減している可能性があった。

いよいよ死がすぐ目の前の現実になろうとしていることを意識した。登山をする前は、まだ死は遠い存在だった。残りの人生、うまくすればあと五十年は生きられると思っていた。五十年と言えば、非常に長い時間だ。今悩んでいるようなことは努力次第で打開できるし、何とでもやり直せる。だからこそ簡単に死を選んではならないのだ。今それがはっきりとわかった。

だが、残念なことに今、死は完全に目前だ。もっと真剣に生きてくればよかったという、激しい悔恨が心に怒涛の如く押し寄せてきた。身を切り裂かれるほどに無念だった。現状、これほどの過酷は経験した者でなければ絶対にわからないだろう。

大した親孝行もしていなかった。一度だけ両親を一泊二日の国内旅行に連れて行ったことがある。それ以外、親を喜ばせることをしていない。体が弱かったから、わがままが大抵許された。ここまで大切に育ててくれたのに、両親に何も恩返しができなかった。今頃、両親は憔悴しきっているだろう。盆休みの独りよがりのストレス解消など、やるべきではなかった。

それともうひとつの悔いは、結婚のことだった。月並みな家庭の味も知らないで、旅立たねばならない。一体、この世に何のために生まれてきたのか。こんなにも短くつまらない人生だったのか。次々に湧き上がる後悔の念。しかしついに死を受け入れる覚悟を決めた。決めざるを得なかったのだ。

翌十日目。彼はまだ生きていた。やっと生きていた。何も考えることができなくなり、ただボーッとしていた。川べりに横たわり、右手の平で少し水を掬った。口に持ってきたが、大半はこぼれてしまい、わずかな水のしずくさえも飲む気力がなくなった。生きる努力など、どうでもよくなりかけた。そのまま、死んでしまう方がどれだけ楽なことか、と思った。

だが、一方で自分が死ぬはずがないとまだ思っていた。あの祖父の生き方を見よ、どんなに卑怯と言われても、どんなに後ろ指を指されても生き抜いたのだ。その逞しい祖父のＤＮＡが自分の中にもある。その血が自分の体の中を流れてい

る。そう思うと多少元気が出た。

だが、体力は確実に失われていた。まったく動けず、何時間でも眠れるようになった。死が近づくと、あらゆる欲から解放される。清々しい思いが湧いた。それは初めて経験するものだった。快感でもあった。そうしてみると、死は思っていたほど辛く寂しいものではないかもしれない。朦朧とした頭でそんなことを思い、彼はそこでまた眠ってしまった。

何時間たったのか、わからない。眠りから覚め、リュックから何かを出そうとしたときだった。何を出そうとしたのか、憶えていない。憶えているのは、そのとき誤ってリュックを川に流してしまったことだ。遭難以来、肌身離さずに持ってきた命の綱ともいえるリュック。十分な準備をした、そのリュックまで失った。いよいよ、彼は絶望の淵に立たされた。

（七）

敏夫の不明から十日目のことだった。佐渡夫妻は『両神山』の入口に近いバス停『日向大谷』から徒歩一分のファミリーレストランに行った。これまでやってきた同様のことをここでも実行したのだ。ビラを手に持ち、応対に出てきた若い女店員にいつもと同じ話をした。

「私たちは行方不明になったウチの息子を捜しています。この子です」

ビラには敏夫の姿がプリントされている。すると彼女は首を傾げた。いつもと違う反応なのだ。

「あら、この人。この前、見ましたわ」

と言ったのである。夫妻の顔色が変わった。初めて経験する反応だった。

「えっ、本当ですか。これは私たちの一人息子で、山に行くと言ったきり、十日も経っているのに帰って来ないんです。遭難したと思っています。どうしても助けてやりたいんです」

ワラにもすがる心境で、佐渡冴子は一気に話した。

「私、このファミレスで長いこと働いているので、地元の人たちの顔は毎日のように見て覚えているんですが、この人は初めて見ました。随分と背の高い人だな、と思いました。それで何となく憶えていたんです」

「そうです。息子は身長が一メートル八〇くらいあるんです」

冴子は狂喜するように答えた。

女店員はさらに敏夫の座っていた席まで二人を案内し、そのときの食事の様子まで話した。ハムエッグとハンバーグそれにクロワッサン、それらをコーヒーと一緒に食したという。

夫妻はついに手がかりを見つけた。闇夜に灯った一縷の希望の光であった。店入り口の防犯カメラの映像を警察関係者と一緒に見たが、敏夫の姿がはっきりと捉えられていた。冴子は久しぶりに息子の姿を見た。心の中で息子を強く抱きしめたのである。

敏夫の登った山が、ついに『両神山』であると特定された。この山に絞って捜索すればよくなった。早速、捜索隊が『両神山』へと向かった。が、『両神山』と特定できたところで、捜索範囲は依然として広い。結局、その日は何の収穫もなかった。

ところが、その翌日のことだった。重要な手掛かりが得られた。それは、遭難者のものと思われるリュックだった。『両神山』から流れ下る沢の下流にいた、二人の小学生が見つけたのだ。

「あれっ、何だ。リュックみたいだぞ」

ひとりが叫んだ。すると、もうひとりの方が言った。

「父ちゃんがこのあたりの山で人が遭難した、と言っていた」

二人はリュックを初めに見つけた男の子の家に持ち帰り、母親に話した。遭難者のものに違いないと判断した母親は、警察に持参し中味が確認された。しかし遭難者本人のものと断定できる証拠は見つけられなかった。

それでも警察および捜索隊は、遭難者は沢の近くにいると考えた。『両神山』を流れる沢一帯を調べ始めたのである。それが敏夫の遭難から数えて十四日目のことだった。

（八）

沢付近で横たわっていた敏夫はすでに意識がはっきりしない状態だった。そしてとっくに死を覚悟していた。いつ死が訪れるのか。だが沢から見上げる景色は、以前と変わらず青い空と白い雲だった。ということはまだ生きている。むしろ、まだ死なないのが不思議だった。それが信じられない。自分が遭難してから何日経ったのかさえ、すでにボンヤリしてわからない。

沢の近くに横になって何日目のことだったか、彼は突然増

水した川の流れの中に放り出されたことがある。ウトウトしたとき、次の瞬間、冷たい水の感触で目覚めたのだ。そのときは、夢中で岩の上にはいずり上がった。だがそれがいつだったのか、もう思い出せない。もし、同じことが再び起きたら、そのときが自分の死ぬときだろうと思った。

『恐らく、死は甘美なのだろう。肉体が持つ、様々な苦しみ、そして悩み、さらには際限のない欲望。それらから一切解き放たれて魂は自由になる。どこか、遠いところへと魂は飛翔する。ああ、もういいな、もう十分だよ。生きた時間の長さなんて主観に過ぎない。もう十分に生きたよ。そんな気がする。早く死んで楽になりたい』

敏夫は、殆ど思考能力が失われている中で、そう思った。そしてまた眠りに落ちた。あらゆる欲が抜け落ちていた。

夢を見ていた。フワフワとした雲に乗っている夢だ。快適だった。これほど気持ちがゆったりとして、安心した境地にいることはかつてない。これが死後の世界なのか。すると死は思いの外、快適なのかもしれない。

ところが、次の瞬間、思いがけないことが起こった。自分の眠りを妨害する何者かが両肩を揺すったのだ。何とも不快だった。

『やめてくれ。僕を心地よい夢から目覚めさせないでくれ』と彼は心の裡で叫んだ。

「佐渡さんですか？　佐渡敏夫さんですよね」

そう叫んでいるように聞こえた。彼は目をうっすらと開けた。目の前に二人の人が立っているように見える。夢なのか。あるいは幻なのか。それが誰なのか、一体何が起きているのか、まだわからない。現実はまだ夢うつつで、霧の中だった。

しかし次第に覚醒した。それは、ひょっとして自分を捜している人たちなのではないか？　次の瞬間、自分は助かったのかもしれないと漠然と考えた。本来ならここで感動するはずだった。しかし感動しなかった。彼は感動できなかったのである。

試しに右手を前に伸ばしてみた。それが現実であることを確認するように伸ばした。そして捜索隊の人に手を握って欲しいと思った。すると、それがわかったのか、その人は強く握り返してくれた。ここで現実をはっきり認識した。ついに生還したと思った。目からは涙が糸を引くように流れ落ちた。

だが反面、不思議に思った。自分は死にたかったのではな

いか？　それなのに生還を喜んでいる。すべてから解き放たれて、自由になれるところまできていたのに生還してしまった。こんな自分とは一体何者なのだろう？

さらに何人かの人々が集まってきた。発見した喜びを大声で語り合っている。奇跡だ、これは奇跡だよ、そう叫んでいる声があった。どうして奇跡なのだろう？　自分が助かったことがどうして奇跡なんだ？

担架が運ばれ、敏夫はその上に載せられた。そして体が斜面の上方に引き上げられたとき、驚くべきことが起きた。突然、沢が増水し今まで彼が横たわっていた場所を大量の水が洗い流したのだ。もしも発見がもう少し遅れていたら、水は彼を川底へと押し流したであろう。流れに抵抗できる力はなかったから、間違いなく死んだ。薄目を開けて、その状況を心に描いてみた。彼の思いは確信に変わった。

『自分はまだ生きていいんだ。むしろ生きなければならない。これが神様の思し召しなのだ。聖書に、人間は神の所有物だとある。とすれば人間をどう使用しても人間からどのように利益を収奪しても、どう処分しても自由なのだ。そして処分とはいつ殺してもいいということだ。その神から自分は生きることを許された。今まで辛いことから目を背けてきたが、生きているからこそ辛いと認識できる。死は確かに楽で甘美かもしれない。しかし死んでしまったら何も経験できない。生きるということは、あの世に戻るまでに多くのことを経験し多くのことを魂が学ぶ作業ではないのか？　生きることはそれだけ意味のあることなんだ』

（九）

両神山から奇跡的に救助された敏夫は、意識が完全に戻っていない状態で、すぐさま救急車で最寄りの病院に収容された。

救急車に同乗した二人の救急隊員は小さな声で言葉を交わした。

「しかし奇跡だよな。二週間以上も山中に閉じ込められてよく生きていたもんだと思うよ」

「そうだよな。こんな事例、世界でも珍しいんじゃないか。ギネスもんだよな」

「それにしても痩せているな。骨と皮だ。人間というのは凄

まじい生命力を持っていることの証明だ。今回改めてわかったよ」

敏夫は確かに頬がこけ顎が尖り、あばら骨が浮き出て、全身の骨にかろうじて肉がくっついている。そんな感じだった。二週間前の姿を見ている人には信じられない変貌ぶりだったに違いない。

直ちに点滴によって栄養剤が注入され、そのまま深い眠りに落ちた。両親や明子、それに姉たちが病院に駆けつけたが、面会謝絶で結局その日は会えずじまいだった。

翌日になって、早い時間から両親や明子、それに姉たち夫婦が仕事や家事を止めて、再び病院に駆けつけた。皆が喜びを爆発させ、大きな歓声を上げ、涙を流している。中でも一番大きな声を出しているのが、やはり母親の冴子だった。

「みんな！　やっぱり言ったとおりだっただろう。敏夫が死ぬはずがないのよ。この子の生命力はすごい。やっぱり私の子だよ」

「そうだよ、そうなんだよ。よかった。とにかくよかった」

父親の重幸が目を真っ赤にして泣き声になっている。

明子が両親の陰でやはり泣いていた。その様子をボンヤリとした状態で敏夫が見ている。二人の目と目が合って離れようとしない。上の姉がその様子に気がついた。

「お母さん、お父さん、二人だけにしてやりましょう。最も幸せな瞬間よ。私たちは皆で病室を出るのよ」

母親は病室に長くとどまりたかったようだが、それでもしぶしぶ出て行った。残された二人。初めに明子が声を出して泣き始めた。敏夫も一緒に黙って泣いた。明子が敏夫に近づき、その胸に飛び込んだ。左足が悲鳴を上げたが、両腕に力をこめて明子を抱きしめた。敏夫にとって最高のうれしい瞬間だった。

それから一週間、毎日のように両親が見舞いに来た。勿論、明子も来た。しかしそれからは親の方が少しずつ遠慮して、見舞が一週間に一度のペースになった。明子に遠慮したのである。

病院は優秀な外科医がいることで有名なところだった。それだけ敏夫にはツキがあったのだが、医師団は治療方針がなかなかまとまらなかった。悲観的な意見を言う医者もいた。骨折によって二週間もの間、血流が止まっていたために手術

が難しいと言うのだ。一方で、仮に失敗しても万に一つの成功を期してやってみなければわからないと主張する医者もいる。わからないとは無責任すぎると反対する医者もいる。何度も苦しい思いをさせて結局ダメでしたではすまないと言うのだ。

足首の状態はそれだけ悪くなっていたのである。骨折し血流が途絶え肉は腐って骨がやっとついていた状態だったからだ。

結論が出た。結局、切断を免れるのは無理ということになった。左膝から下を切断することに決したのである。

一度死んだ命だったから、敏夫には切断される恐怖はなかった。切断も自分に課せられた運命として受け容れようと考えた。そう考えると人生がすべてポジティブに変化した。運命を甘受できるようになったのだ。

敏夫は明子に言った。

「やっぱり、左足首はダメだったよ。どうやら膝から下を切るらしい」

「義足にすればいいのよ。でもね、これは決して他人事で言っているわけじゃないのよ。あなたの問題は私の問題なんだから。それにね、今の義足は優れているから、違和感なく使えるらしいわよ」

「ごめんな。こんな体になっちゃって」

「何言ってるの。何も変わらないわよ」

「もっと早く結婚していれば、いろいろ悩むこともなかったし、ひょっとしたら山に登ることだってなかった」

「そうかもしれないわね。でも済んだことよ。これからのことを考えなければね」

「会社も辞めることになると思う。入院生活がいつまで続くかわからないし、会社も自分を必要としていないし、これ以上迷惑をかけるわけにもいかないし」

「いいわよ。大丈夫よ。あなたが働けるようになるまで私が頑張るから。その代わり、あなたが働くようになったら、私、専業主婦になるわ。ずっとそれが夢だったのよ」

それらの言葉を聞いたとき、敏夫は明子と一緒になると心に決めた。決心すると、安堵の思いで敏夫の胸は満たされた。遅かったが、これからだって十分間に合う。人生なんて考えようで長くもなれば短くもなる。人生なんて、すべて心の持ちようなんだ。文字通り、明子の持つ明るさを自分も共有さ

せてもらう。
　たかが左足の一本が不自由になったところで何の問題があると言うんだ。どのように生きたところで人生に大した違いがあるわけでもない。極端なことを言えば、歴史に残るような功績を残した人、無名のままで人生を終える人、そのどちらが偉いという問題でもない。負け惜しみでなく、皆同じだ。ただ生きている間が重要だ。その間に自らの価値観に沿った正しくて楽しい生き方、充実し他人に役立つ人生ならばそれ以上に望むことはない。それがオカンの言ってたことだ。自分はこれから堂々と誰に遠慮することもなく、胸を張って自分にしか出来ない生き方を貫く。
　敏夫はそう決心したのである。

　敏夫は生まれ変わった。遭難によって、一部の貴重な時間が失われはしたが、逆に大切なものを手に入れた。両神山での遭難が実は神が与えた試練で、それを乗り越えた自分に素晴らしいご褒美を用意していたのだと敏夫は思った。それ以後、彼の人生で恐いものがなくなった。

（了）

「印書文学の会」について

・本会は、「印旛文学の会」と称し、文芸「草の丘」を年に二回発行する等の文芸活動を行う。
・文芸「草の丘」は、簡易製本の冊子を若干部発行するとともに、ウェブサイトに全文を発表する。
・会員は、印旛地域に関係がある、もしくは関心がある人で、詩や小説、随筆等を創作し発表する者とする。
・会員は、年会費千円を負担すること。年会費では対応できない費用が発生した場合には、会員はその費用を分担するものとする。
・会員は、自作の未発表作品を投稿できるが、掲載については編集会議でその可否を検討する。
・作品の長さについては特に規定しないが、一回に掲載できる枚数は、原稿用紙で一〇〇枚以内とする。
・その他、会の運営に関する重要事項の変更については、合評会等の場で、会員に諮って決するものとする。

牧水の里紀行

―若山牧水と尾鈴山―

唐瀬　光

今から百三十年前、九州の宮崎県東臼杵郡東郷村（現日向市東郷町）の山間に、二代続く医師の家があった。

そこに一人の元気な男の子が生まれる。繁と名付けられ、後に若山牧水と名乗り、歌人として一世を風靡した人物である。

彼は家業の医師を継がず、地元の延岡中学校卒業後、東京に出て早稲田大学英文学科に入学する。そして短歌や俳句に没頭し、そのまま東京で文筆活動を続けた。

文学仲間として、『赤い鳥小鳥』で有名な福岡出身の北原白秋や、盛岡から上京して来た石川啄木などがおり、歌人同士の緊密な付き合いを保っていた。

特に、歌集『一握の砂』に残された歌がある。

『東海の小島の磯の白砂に我泣きぬれて蟹とたはむる』

この歌をつくった石川啄木が結核を患い、二十六歳の若さで早世した時には、日々の看病から薬代の金策に至るまで、つき

っ切りで世話をし、彼の最後を看取ることになった。
その頃、日々衰弱していく啄木が、懸命に自分を看病している牧水に向かって「若山君、僕はどうしても死にたくない」と、切なる心情を訴えている。
明治最後の年、啄木はそばで看病している牧水に弱々しく微笑むと、静かに息を引き取った。
この時、牧水は「僕がもう少し早く薬を買う金を持って来たら、君は死なずに済んだのか」と、慟哭したという。
親友の啄木を失った後、牧水は一旦宮崎の実家に帰り、呆けたように過ごしていたが、やがて再び上京して、文学活動を続けることになる。
そこで短歌結社『アララギ』に寄稿していた太田喜志子と結婚し、所帯を持つに至った。
その後、妻とともに沼津に移り住み、そこで生涯を終えることになる。
『生涯を終える』といっても、彼は急性胃腸炎と肝硬変を併発し、四十三歳で没しているから、当時の平均寿命がいくら短かったとはいえ、かなりの若死にであろう。

その牧水の歌に、尾鈴山を歌った作品がある。
尾鈴山とは、宮崎県の中央部から、やや東に寄った児湯郡の地にあり、都農町と木城町にまたがる、標高千四百メートルの山である。
その頂上からは、北に都農の田園風景を望み、南には、戦国時代に『九州の天下分け目の戦い』といわれる大友軍と島津軍の一大合戦のあった木城の山並みが見渡せる。
また東の方には私の生まれ育った川南台地、そして西には牧水の生家がある東郷町の谷合が続いている。
私は幼少の頃より、毎日、尾鈴山を西の空に眺めて育った。
晴れた日の夕暮れ時、その山稜に大きな日輪が落ちる、そのわずかな時間、西の空が真っ赤に染まる。
そのあざやかな夕暮れ雲に、心が震えるような感動を覚えたものだが、牧水の生家からは、夕日ではなく、明るい朝日の立ち昇る風景が見えたことであろう。

尾鈴山のなだらかな山稜は、私の通った高等学校の屋上からもよく見えた。もう半世紀も昔になるか、私は高校のクラブ活動として、山岳部に所属していた。

山岳部といっても、高校生のこと、大学のクラブ活動のように、切り立った岸壁を登るロッククライミングをするわけではなく、一般の登山道を、女子部員を中央に、十数人が隊列をつくり、重いリュックを背負って黙々と歩くだけ。

その活動は『山岳部』というより、普通の登山部に近いものであった。

そのクラブに所属している間、私は宮崎県下のいろいろな山に登ったが、主な訓練場所は、最も近くにそびえている尾鈴山である。

部活顧問の若い生物学の先生は、毎週のごとく部員たちを引き連れ、登山道の脇にはびこる珍しい植物を紹介しながら、尾鈴山の山頂を目指したものだ。

但し、珍しい植物を見つけても、それを採ることは厳禁。

ある日の登山訓練で、私と同じ同級の男子が、道端に咲いていた赤い花を摘んで手に持っていたら、その先生の怒ったこと。

普段は穏やかなその男性教諭は、顔を真っ赤にしてその男子生徒を怒鳴りつけていた。

そばで見ていた私たちはびっくりして度肝を抜かれ、その後、道端の草木に手を出す生徒はいなかった。

ただ、道理さえ守れば、とてもいい先生で、途中、白滝（しらたき）、矢研（やとぎ）の滝などの荘厳な流れのある登山コースを選びながら、傾斜地の登り方、足の運び方などを熱心に指導してくれたものである。

その頃、苦しい登山道を登りながら、みんなでよく山の歌を歌った。

特に、「そんなに急ぐと、山が逃げるぅ～よ。ゆっくり行こう～　ゆっくり行こう～　あせらずに行こう～」と、ゆったりした歌詞の『二人の山男』などを、好んで歌ったものだ。

今から考えると、この頃の自分が、半世紀以上を生きた私の人生の中で、最も楽しかった時代であったように思う。

やがて尾鈴山の山頂に着くと、眼下に広がる青い宮崎平野を見渡しながら、先生や女子部員も交えて、一同、我が山岳部の『部歌』を斉唱する。

その部歌とは、前掲の若山牧水が故郷の尾鈴山を歌ったもの

であった。

その歌詞は、単なる詩句の形式を取っているだけだが、歌いやすいように、音楽部の先輩が、リズムやハーモニーをつけてくれた。

その歌を一同十数人が山頂に整列して、声をそろえて歌う。

「ふるぅ～さとのぅ～　尾鈴ぅの　やぁ～まぁ～の　悲な～しさよう～」

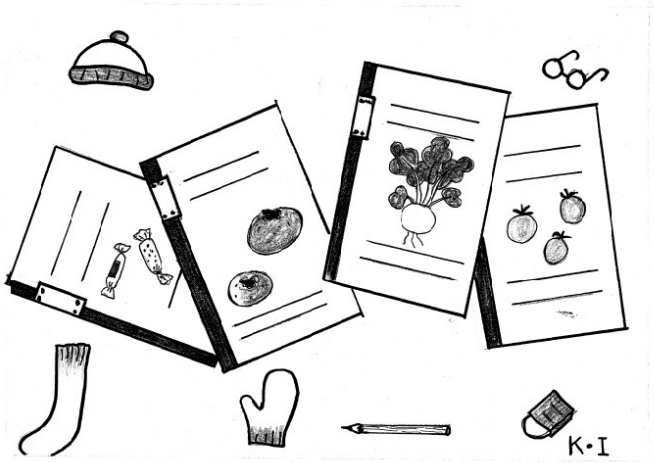
思えば、それは少年の頃の楽しい思い出。若い私の心が、将来の夢と希望に輝いていた至福の時代であった。

ふるさとの　尾鈴の山の悲しさよ
秋もかすみの　たなびきてをり
牧水

そよのバアバの空中サロン

―その八　将来の希望―

中川　とら



一日中肌寒く、小雨の降る夕方だった。
そらさんから、ＬＩＮＥに朗報が入った。
「父帰る！」
――え！　お父さん帰られたの？　めっちゃ、よかったじゃん。
彼女のお父さんが東北に単身赴任されてから、そろそろ六年になるだろう。
――これで、病気がちのお母さんと引き籠りの妹さん、三人の不安な毎日は終わるかもしれない。
とっさに私はそう解釈した。
――でも、なんでこれだけなの？
普段から、メールは簡単明瞭、遊び言葉も絵文字もなしのそらさんだけど、三文字はちょっと変な気がした。
自分としては、胸いっぱいのお祝いを返信したいのに、思うような言葉が出てこない。既読が送信されているから急がないと、あせればあせるほどなんてかえしていいのか分からなくなる。
結局、ありきたりの「よかったネ！」と虹の絵を送った。
返信は、来なかった。

それからずっと、頭の中はそらさんの家族のことでいっぱいになり、ベットに入っても眠れない。

わたしは思った。世の中には、家族の問題で悩みが広がるそらさんのような人がいれば、静子おばさんのように家族がいても、一人寂しくくらす人もいる。

わたしはどうか？　母は少々短気で口やかましいが元気に働いている。バアバはやさしく知恵のある人だ。二つ年上の姉は、心が穏やかで、何事にも「ふーん、いいんじゃない」と言う。我が家で唯一男性の父は、改めて観察したことはないが、姉と同様に感情表現が乏しい。けど善き人だ。

そらさんのように、悩みの原因となるものは、これまでの我が家にはなかったように思う。

と言って、感謝の思いがふくらんだ記憶はない。これが、あたりまえと感じていたんだろう。

とすると、今日までのわたしの安心は、この家族によってつくられたものだったのだ。

改めて、自分が恵まれて育ってきたことに、わたしは気づかされた。ひょっとして、わたしは苦労知らずのおばかかもしれないと。

一体、そらさんのお父さんは、どんな人なんだろう。

――これから二人の娘と妻に深い愛情を注いでくれるだろうか。かっとなって暴言をはいたり、手を上げたりする人ではないだろうか。冷静？　自己ちゅう？

ネガティブに想像をふくらましているうち、わたしはうつらうつらしながら悪夢を見た。。

それは、小雨の降る夜、そらさんが泣きながら裸足で走りさっていく映像だ。

それからこれと言って特別な出来事もなく、十日ほどが過ぎた頃、進路希望を提出する日が近づいていたことに気が付いた。

大学に進学する決意はしていたが、志望校を決めかねていたのだ。

行きたい大学と行かれる大学は違う。学力に見合った大学、学部、それも課題だった。

――まっいいか。自分にぴったりなんてとこある訳ないん

だから……。

どたん場になると、わたしはいつもくたびれてしまい、なるようにしかならないというところがある。

そらさんはどうするんだろう。あれ以来メールは来ないし、「父帰る！」の件は、母とバアバには言っていなかった。いつか伝えなければならないだろうけど、その前に自分の気持ちを整理し、そらさんの話しを聞く心の準備をしておきたいかったのだ。

心の友とは言え、かかわれない、かかわってはいけないことがあると思い始めていた。

彼女の身の上におきたことは、たとえそれが辛いことであっても、本人自身が受け止め乗り越えなければならないことだ。そらさんならきっとそれを立派にやってのけるに違いない。何かが動き出したら、連絡も必ずあると確信がわいてきた。

バアバがよく言っていた、「待てば海路の日和ありよ」って。

心配と期待のはざまで揺れながら、大人への扉が、わたしにも大きく開き始めている。

志望校は、二校、先生が薦めて下さったとこと少しランクを落とし自分で選択したとこを提出することにし、その晩両親に報告をした。

冬休みに入ったばかりの金曜日、待ちに待ったそらさんから電話が入った。

「リコピン、わたし。　この間はメールありがとう。驚いたでしょう？」

「うん……。でも、よかったじゃない。安心したでしょう？」

とわたし。

「それは、とっても。こんど会った時に詳しく話すわね。」

瞬間、今日までの心配のおりのようなものがスっと流れていくのを感じた。

「実は父がね。あなたとそよのバアバに、ご挨拶に伺いたいって言ってるの。忙しい時に悪いなって思うんだけど、いいかしら。」

「かまわないけど……」

それから二言三言やりとりして電話は終わった。わたしは携帯に目をおとしたまま、事の意外な展開にボーッとしてい

る。

バアバに連絡すると、それは嬉しそうに手を叩きながら「まあ、よかったこと、よかったこと」と、訪問の件も快く承知してくれた。

そして、冬晴れの陽射しが気持ち良い日の午後、約束通り、そらさんとお父さんがバアバのマンションにやって来た。

モニターに写った二人が緊張して起立している。わたしとバアバはその映像が妙にまぶしく、思わず顔を見合わせ涙ぐんでしまった。

お父さんは玄関先で深々と礼をされてから、「石野そらの父でございます。突然おじゃまいたしまして申し訳ございません。いつも娘が大変お世話になりまして、ありがとうございます。」と言われ、もう一度ていねいに頭を下げられた。

バアバは「中川そよのと申します。ご丁寧なご挨拶、恐れ入ります。」と一礼してから、すぐに「まあまあここではなんですから、どうぞお入りくださいませ。そらさんもさっ、いっしょにどうぞどうぞ。」と二人を招き入れた。

「本来でしたら、母親である妻がご挨拶に参らなければならなかったのですが、体調が悪いもので、長い間、失礼をいたしました。

幸い私が先月、赴任先から戻りましたので、遅ればせながら、お伺いさせていただきました。」

わたしは、余りにも礼儀正しく誠実なお父さんの姿に、不思議な感動すら覚えた。

「いいえ、わたしは何もしていません。そらさんがとても立派で、その上、孫と仲良くして下さるのが嬉しくて、見守らせていただいているだけです。」とバアバは応えた。

そらさんは時々わたしに目線を向けながら終始にこにこだまっている。

和やかなやりとりは、かれこれ二〇分ほどつづいただろうか。それから二人は静かに帰って行った。

テーブルの横に、きれいな包装紙の包みが三つお行儀よく並んでいる。

帰りしな、バアバはそらさんのお父さんから頂いた三つの包みの一つを母に渡すようにと言って、わたしに持たせ、もう一つの包みを自分が持って、「これは静子おばさんに」と言いながら、いっしょにドアの外へ出た。

年が明け、そらさんと会う機会がつくれた。その時、彼女は生き生きとこう語ってくれた。

お父さんがお母さんに優しく接してくれ、新しい病院を捜し連れて行ってくれた。その後、よい薬に出会い、少しづつ回復に向かい始めてると。

引き籠っていた妹さんは、時々お父さんと二人で夜間外出ができるようになり、今ではお父さんと一緒に外食も楽しめるほど明るくなったらしい。

そして、なにより彼女自身がうれしかったのは、家の中がきれいだとお父さんに褒められたことだと頬を赤らめた。

そらさんはバアバに言われた通り、どんなに忙しくても、台所、玄関、トイレのお掃除を怠らなかったのだ。

一回りも二回りも成長した目の前の友が、あまりにも美しくして、わたしはただ「そう、そう」と心で称えることしかできない。

進路の話になった時、珍しくそらさんの方から、自分は行きたい学校があると、切り出してきた。

うすうす分かっていたけど、やっぱり難関の国立大学だ。

「必ず合格するわ！」わたしは力を入れて言いきった。

「リコピンは？」とそらさんが聞いてきたので、「わたしは、行けるところに行くわ」と応えると、「えっ？　それどういう意味？」と首をかしげる。わたしは可笑しくて、のけぞって笑ってしまった。

春が来て、わたし達は三年生になった。そらさんはアルバイトをやめ、今や本格的な受験モードにはいっている。わたしも影響をうけ、本腰を入れて日々机に向かい始めた。

若葉が萌えて、やがて初夏の香りが清々しい季節がやってきたある日、バアバが二人の受験勉強の陣中見舞いをしてあげたいと、誘ってくれた。

「いらっしゃい」そう言って迎えてくれたのは、一階の静子

さんだった。
「ワーッ！　静子おばさん、久しぶりですネー。」
わたし達が歓声を上げると、台所の方からバアバの声がする。
「また、四人で楽しもうと思って、声を掛けたの。ご馳走は静子さんと二人で作ったのよ。」
「ありがとうございます」お礼を言うと、「勉強、勉強で根を詰めてるだろうから、少し息抜きも必要よね。」と静子さんが優しく言った。
テーブルの上には、旬の魚、野菜、くだものが彩り鮮やかにあしらわれ、まるでお祝の席のようだ。それになんと、ステーキまで。
「すごいご馳走！　幸せだわー！」
「さぁ、さぁ沢山召し上がれ。そらさんも遠慮しないで。」
美味しい食事は、楽しい会話を引き出してくれる。
話題はまた、本のことになった。
「受験勉強ばかりだと、本を読む時間がないでしょう。」静子さんが聞いてきた。
「はい。でもたまに詩を読みます。」とそらさん。
「息抜きできるのかしら」バアバが言った。
「リセットできます」
「なるほどね」
二人は同時にうなずいた。
「わたしは童話を読むよ。この間、アンデルセンの赤い靴を読んだ」とわたし。
「あっそう」
バアバの返事が余りに味気ないので、わたしはうっかり「あっ、そらさんをえこひいきしていませんか」と返してしまった。すると、「お酒を飲んだ訳でもないのに変なことを言うわ」と苦笑いしながら静子さんの方に目をそらしてる。
わたしは気まずい思いを振り切るため「将来の希望について話しましょう。」と突拍子もない発言をした。テーブルの下で、そらさんがわたしの膝をつねった。
ところが意外にも二人は目を輝かせ、
「将来の希望なら、いくらでもあるわよねー。静子さん。」
「ええ、ご披露してもいいですよ」と嬉しそうだ。
わたしは（質問の意味をわかっているのかな、この二人）と疑ったので、「あっバアバ、わたし達が先に言います！」と

手を上げた。
　するとバアバは、それをさえぎってこう言った。
「ダメ、ダメ、先の短い者から発言させて！　まず、健康で最後まで自分の足で生き抜くこと。そしてまた、日本に生まれる。ピアノを習う。大学で学び学者になる。誠実な人格者と家庭を築き、子を育て、世の中で必要とされる人間として生きる……。それが将来の希望よ。」バアバは満足気だ。
　次は静子おばさんが続いた。
「健康で寝込まず旅立つことね。そして私はヨーロッパに生まれたい。パートナーはロバート・デニーロみたいな人がいいわね。」
　返す言葉がなくなった。生まれかわれることを心から信じているのだ。わたしとそらさんは真顔で二人を見つめた。
　それから、わたしとそらさんは、とりあえず大学に合格し、目指す専門分野でスペシャリストになることが自分の希望ですと発表した。
　すると静子おばさんが、「ところで二人は恋愛には関心がないのかしら」と言った。
　すかさず、そらさんが「いい恋愛をします。」と言ったので、わたしも「出会えたら、考えます。」とはぐらかした。
　時間がたつにつれ、わたし達は半世紀以上の年の差があることを忘れそうになっている。
「あら、富士山が見えるわよ！」
　バアバが窓の外を指した。
　ベランダに出ると、この時期には珍しく雲を払った空に、切り絵のような富士山が現れた。その雄姿の右手前には、ツンと尖った痩身のスカイツリーも屹立している。
　四人は仲よく十三階のベランダに並び、日本一の山と電波塔をしみじみ美しいと思いながら、眺めてた。
「何度見ても感動するわね。鳥になった気分だわ」静子さんがつぶやくと、
「ステキ！ここは、そよのバアバの空中サロンだわ！」と、そらさんが言った。
　バアバは嬉しそうだ。
　そろそろスカイツリーが点灯する。今日はピンクがいいな、とわたしは思った。

完

松本清張「遭難」について

畑中 康郎

この小説は、畑登山を利用して完全犯罪を企図した男の物語である。

ある登山家から「登山をする人には悪い人はいない」と聞いた松本清張が反発を覚え、自ら登山を決行して感覚をつかみ、それを小説にして清張一流の反論を試みたものと言われている。

殺人者として登場する主人公の江田昌利はある七月の終わりに同じ銀行に勤める後輩の二人を誘って鹿島槍ヶ岳に登山した。一人は登山を始めてある程度の経験を積んだ岩瀬秀雄。丁度登山の面白さを理解し始めたころで、最も登山が楽しくなる時期にあった。もう一人は殆ど登山の初心者と言える、浦橋吾一である。

小説は、浦橋が鹿島槍ヶ岳登山の遭難記録を山岳雑誌「山嶺」に手記として掲載したところから始まる。手記は比較的長く、登山の計画段階から始まって、いよいよ七月末に出発する段階、すなわち寝台車を利用して山に向かうところ。登山が始まり、途中で岩瀬が何度も水を飲むシーン。長い時間

を休憩するシーン。岩瀬の背負う荷をリーダーの江田が軽くしてやるシーン。山の形が似ているために江田が牛首山を鹿島槍ヶ岳と誤認しキレット小屋に到達できずに遭難するシーン。その結果、岩瀬が寒さと疲労が原因で精神に異常をきたし登山服を脱ぎ捨て全裸状態になって凍死するシーンなどが克明につづられていた。

私は、登山の素人である清張にしては完璧に近い登山の知識にまず驚嘆した。素人の私が読んでも登山の情景が事細かく手に取るようにわかる。やはりこの人は何を書かせても一流の作家であると思った。ただ気になったのは、物語の設定上、浦橋吾一が手記を書いた形になっており、登山の初心者がここまで山の描写ができるかな、という微かな疑問であった。

次に私は浦橋の手記が終わるまで、推理小説の大家としての地位をほしいままにしていた清張にしては珍しく登山に限定して書いた小説と思っていた。しかし勿論そうではなかった。次第に清張一流の殺人推理に変化していくのである。

手記の場面が終わって登場するのが、死んだ岩瀬の姉・真佐子である。彼女は弟の死にショックを受け、死の原因にずっと思いをはせていた。そんなときに目にしたのが、浦橋の手記だった。一読したとき、疑念が大きく膨らんだ。弟の想像以上の疲労とそれがもたらす遭難死は仕組まれたものではないのか？　そのことを従兄の槙田二郎に相談すると、おそらく槙田もそれに同意して二人がともに江田による殺人を確信したに違いない。

なぜなら手記の中で、あれだけ健康で強い肉体を持っていた、弟の秀雄がゆったりと睡眠をとるべき、また実際に一般客車に比較してはるかに睡眠の取り易い寝台車において眠れなかった様子が綴られていたからだ。何故眠れなくなったのか？　それは江田からある事実をそれとなく告げられたからだ。それは小説の終末に明かされる。

眠れなかったことが原因で、岩瀬秀雄は翌日の登山に酷い疲れを見せ、何度も休憩を取らねばならなかったこと。必要以上に水を飲んだこと。そして途中からは岩瀬のリュックまで代わりに背負ってやったこと。実は必要以上の休憩と飲水、それにペースを変えることになる荷の軽減化は余計に疲労を蓄積させることを登山のベテランなら基礎知識として持っているはずだった。だからふつうならそのように指導しな

い。また登山のベテランである江田が道を間違えて、宿泊予定のキレット小屋に辿り着けなかったこともおかしい。遭難地点より東の地域に該当する地図だけを用意させ、遭難地点およびその西の地域に該当する地図を始めから二人に持ってこさせなかったことも真佐子の不審につながった。それらのことが彼女の心の中でどす黒い疑念へと昇華していったのである。

槙田と真佐子は、遭難現場に連れて行って欲しいと江田に依頼した。その理由は花を現場に手向けたいとのことだった。江田としてはこれを断る理由がなかった。その段階で江田は、まだ槙田と真佐子が自分を疑っているとは思っていない。現場で祈りを捧げるものと心から信じている。だから躊躇することなく登山に同意した。ただし登山に同行するのは槙田のみである。このことがこの小説のひとつのポイントになる。

ここで私は考える。槙田は現場に登山して何を確認しようとしたのか？　遭難した彼ら三人の動きを単になぞるだけで、何を探ろうとしたのか？　また何を探れると思ったのか？　槙田は判断するために登山したのではない。すでに江田が秀雄を殺したことを確信している。現場に近づくにつれ、江田がボロを出すとでも思ったのだろうか？　天候悪化の偶然が味方したにせよ、緻密な殺人を完璧に実行できた江田という人間は理性的であってかつ冷静、そしてまた残忍なのである。その人間を現場で簡単に自白に追い込めるとでも思ったのであろうか？　そうではなく殺人は予測通りだったことを江田に突き付けることで快感を覚えるために現場に赴いたのであろうか？　しかし現実においてこれはあり得ない。そんなことをしたら槙田自身が危険極まりない状況に置かれる。なにせ相手は殺人を犯した男なのだ。しかも山中で二人だけなのである。逆に返り討ちというか、自分も殺される羽目になりかねない。ところが、作者の清張は小説の中で、槙田は江田が秀雄を殺したとはっきり断言しそのうえで今後事実を公にして追及するとまで言わせている。人は多くの場合、江田の立場になれば、瞬時に殺意を持つだろう。人間というのはあくまで自分中心にものを考え、自分を守る為なら何でもやる存在なのである。そのように神に創られていると言っていい。さすがの清張にしても、この点は現実的とは思えない。

それともう一点。槙田はかなりの登山経験があったために

自信過剰であった。ここがストーリーのもうひとつのポイントなのだが、もし槙田が登山のベテランでなかったら下山の際に北俣出合の壁を真下に降りるという江田の誘いに乗らなかったはずだ。勿論、この誘いは槙田を殺すためだ。ベテランだったために江田に負けたくない競争心から、槙田は迂闊にも壁を降りてやろうと思ったのだろう。殺意を持った江田にとっては、内心しめたと思ったはずだ。ここでなら誰にも知られずに遭難の形で殺人を実行できる。そして案の定、江田が作ったクレバスに槙田は落下して死亡する。

私はここで考えた。槙田にとってこれは容易に想像がつくことではなかったのか？　江田の誘いに乗った槙田はあまりに迂闊で軽い人間に思える。ところが、実際、それまでの彼の言動からはそうは思えない。彼もまた冷静沈着な男なのである。そのように清張は槙田を描いているからだ。ならば殺人者の江田を信用しすぎたか？　これもおかしい。殺人者を信用できるはずがないのである。私には槙田の心理を理解できかった。

いずれにせよ緊張を強いられる殺人現場にいる二人の行動としては現実的とは思えない。私は清張の筆が走り過ぎたような気がしてならないのである。

最後まで出てこなかったのが、殺人の動機である。清張は最後にこれを用意した。北俣出合の壁を降りる中で、クレバスに槙田を落とせると確信したとき、江田より壁の上部にいる槙田に向かって江田は叫ぶ。殺人の動機は、岩瀬秀雄が妻と浮気をしたことだ、と。

私はこれにも少し異を唱えたい。殺人という重大な犯罪行為をたかが浮気くらいで実行に移すだろうか？　勿論、人によって価値観は異なる。妻を死ぬほど愛しており、妻を寝取られたことに自尊心を酷く傷つけられたと深刻に考える人なら、あるいは殺人まで一気に上り詰めてしまうかもしれない。しかしそれは自分の立場だけを考えた結果だ。少なくとも妻を深く愛していたからではない。妻は何も傷ついていないのである。浮気は妻も同意しているからこそ可能なのだ。そうではなく、妻が強姦の被害者でそれが原因で発狂したとか自殺したということであれば妻を思うあまり、江田の行為が俄然現実味を帯びてくると思う。清張はもっと妻を虐めなくてはならなかったのではないか？

そして最後に、槙田が死ぬことで岩瀬秀雄の姉の存在が重

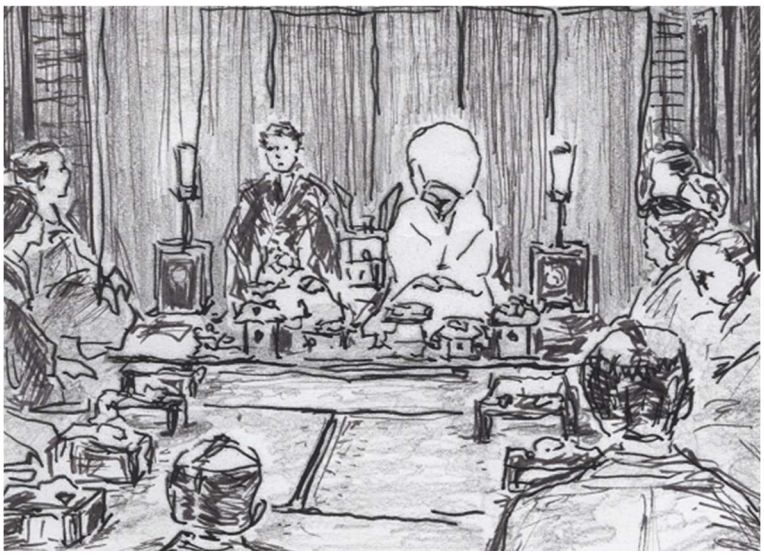
みを増してくる。弟を失い、今度は従兄の槙田二郎を失って彼女が黙っているはずがない。江田は槙田を殺すことによって、殺人者として糾弾される可能性がいよいよ濃厚になってしまったのである。何故なら岩瀬秀雄の遭難だけでは、殺人行為が槙田と真佐子の想像の域を出ていない。証拠がないからである。江田はあくまであれは偶然の事故だったと主張すれば逃げおおせたはずだ。殺人をただ否定すればよかった。槙田を殺すことで、岩瀬について殺人の疑惑は逆に強まってしまったのである。ここが小説と現実の決定的な違いと言えば言えるのである。

清張の「遭難」は単なる遭難をからめた山岳小説から人間臭い、殺人がからんだ推理小説へと変化している。その手法が見事だ。読者にとっては非常に面白くまた興味深い作品に仕上がっている。私の結論は、やはり清張は天才で、読者に考える材料を豊富に提供してくれる数少ない作家のひとりであると再認識したことだった。

（了）

伊能忠敬と四人の妻

香取 淳



一、

朝の家事を済ませた母の民（タミ）は襷（たすき）と前垂れを外しながら居間で遊ぶ一人娘のみつに声を掛けた。

「久しぶりに晴れたわね。今日は日本寺（にちほんじ）の紫陽花を見に行きましょう」

「はい、お母様。みつは紫陽花が大好きです」

「そうね。早くお手玉を片付けておしまいなさい」

母と娘は素早く身繕いをして、身を寄せている平山季忠（すえただ）の大きな屋敷を出た。主（あるじ）の季忠は昨日の朝、江戸に向かい留守であった。彼は湯島聖堂にある幕府の学問所に大学頭の林鳳谷（ほうこく）を訪ね、儒学などを学びに行っている。

タミは季忠の妹で、かつては佐原村の伊能家に嫁していた。しかし、長女のみつが生まれて間もなく、夫の長由（ながよし）が

病死すると暇を出されて、今は日本寺のすぐ近くにある平山家に戻っていた。

道幅が一間ほどの坂道を上り、平地に並ぶ墓石の脇を過ぎると、数分で日本寺の山門に着く。『正東山』の扁額が掲げられた山門の数間先には本堂が聳え建っていた。タミは門の前で足を止め、両手を合わせて深く一礼をすると、その脇で七歳になるみつも小さな手を合わせて、母と共に山門を潜り抜けた。

本堂に続く敷石の両側は深い杉林で、太い幹の根元には隙間もなく紫陽花が咲いている。

「お母様、綺麗ですね」

「本当に……」

杉の葉で陽光が遮られるためか花冠はどれもみな小ぶりであるが、色は目が覚めるほどに真っ青であった。

山門の左奥には、『中村檀林（だんりん）』という僧侶の学校が三十数棟も建ち並び、そこで学ぶ若い僧たちの溌溂（はつらつ）とした声が杉木立や紫陽花を越えて聞こえてくる。

みつは父の顔も知らず、生まれた家が何処にあるのかも知らずに育った。母の実家で何事も控えめに暮らし、朝夕の食事も季忠の家族から少し離れたところに膳を置く日々を送っている。

村の名主で藩の下役人でもある季忠の家では躾（しつけ）が厳しく、食事時の会話は殆んどなかった。とはいえ、季忠の幼い子たちが「父上、父上」と呼ぶのを見て兄弟より少し年下のみつが「父上」と口真似することもごく自然な成り行き。そのようなときタミは娘の耳元に口を寄せて、「父上ではありません、伯父上と言いなさい」と小声でたしなめた。

みつは、母からの躾に加えて、最近では大人の話が少し解かるようになってきた。それらを繋ぎ合わせると、どうやら母は大きな商家に嫁いだものの父が死んでしまい、乳飲み子であった自分と共に実家に戻された模様である。しかし、母は気が強くて、しっかり者。みつの前で泣きごとを言ったり愚痴をこぼしたりすることは一度もなかっ

た。

しかし、タミは朝と夕とに団扇太鼓を持って日本寺に向かい、一心不乱に「南無妙法蓮華経」を唱えている。その脇でみつも口真似をしてきたが、母が何を祈っているのか、幼いみつには分かる術もない。ただ、母の狂気にも似た姿から、わが身の不幸を振り払いたい……という願望が伝わってくるように感じられた。

タミとみつが身を寄せる平山家は下総（千葉県北部）の利根川に沿った地域の代表的な名家である。先祖が拓いた農地、他地域の三倍も米が採れると言われる水田を何町歩も所有する豪農で、家長の季忠は村の名主であり多胡藩の下級武士でもあった。

祖先は武蔵平山（現在の日野市）に始まる中世の武士で、一五世紀の中ごろに中村郷（現在の多古町）に移り住み、北中にあった壺岡城に居城したという。その城の最後の主となった平山季邦は、徳川幕府が開かれる直前に武士を捨てて日本寺がある南中に居を構えた。彼は、江戸城への呼び出しには応じなかったのである。

農民になった季邦の子息たちは利根川流域に広く散らばって農地を開発、肥沃な土地は豊かな実りと富をもたらし、夫々が豪農となって、「平山五軒党」と呼ばれる名主になってゆく。

家督を亡父 秀暁から継いだ季忠は三十四歳で南中の名主になった。彼は、村のリーダーとして優れた手腕を発揮していたが、大の学問好きでもあった。幼少時より読み書き算盤はもとより、遠く江戸の湯島聖堂に通って大学頭の林鳳谷に教えを乞うている。さらに、「含璧」と称して俳諧や和歌を嗜み、地域の文学仲間との交流も盛んであった。

また、季忠は息子の季包や季孝と分け隔てなくみつを可愛がっていた。江戸に出掛けた折には流行りの「三つ折れ人形」（着せ替え人形）や色々な板を並び替えて遊ぶ「知恵板」などを土産に買ってきて幼いみつを喜ばせる。ときには江戸で見聞きしてきた最新の情報を子供たちにも分かるように噛み砕いて聞かせたりもしていた。

一方、母のタミは、読み書きや武家の娘にふさわしい教養や礼節をみつに教え込む。

恵まれ過ぎるほどの環境の中ですくすくと育ったみつが十四歳になったときのことである。佐原村から七郎右衛門と名乗る男が平山家にやってきた。かつてタミが嫁いだ伊能家の分家の者だという。その男は、親戚一同の総意として伊能家の正式な跡継ぎとしてみつを迎えたい。ついては佐原村に戻って、伊能一族の中から選ばれた景茂（かげしげ）と夫婦（めおと）になり家督を継いで欲しい。もちろん母のタミも一緒に…という話である。

みつにとっては、佐原村も伊能家もまったくあずかり知らない先であり、寝耳に水の話。会ったこともない男との婚姻も含めて、母や伯父に判断を任せるしかなかった。

「喜んでお受けします。ねえ、みつもそうですよね。有難いお話ですから」

タミが、頭を深々と下げていい返事をした。その母に合わせて、みつも三つ指をついて頭を下げた。来客と母子の間に座った季忠も繰り返し頷いている。どうやら事前に手紙が届いていて、母と季忠の腹は決まっていた模様である。

「話は決まった。それでは、遠路お出でいただいた客人に一献差し上げよう」

季忠がポンポンと手を打つと、控えの間にいた妻が使用人に指図をして座敷に膳や酒を運んできた。

「ちょっと、台所を見て参ります」

タミはそう言って立ち上がり、席を外した。彼女はそれまで表情を変えることもなく「有難いお話」という態度をとり続けていた。しかし、心の内は複雑で、素直には喜べない。肩身の狭い「出戻り」の身から解放されることには安堵したが、その一方で伊能家の勝手気儘なやり方には心底から怒りが込み上げてくる。

タミの夫、伊能長由は六代目景利（かげとし）の次男で、一度は江戸

の木津屋という商家に婿養子に出された。家督を継いだ七代目の兄　昌雄（まさお）が隠居して家督を八代目の嫡男　景慶（かげよし）に譲ったものの、景慶は二十一歳の若さで病死してしまう。佐原村や家業に嫌気がさしたのであろうか、昌雄は江戸に移り住んで道楽三昧の日々を送っていた。仕方がなく、伊能家は木津屋に婿入りした長由を無理やり離縁させて佐原村に呼び戻し、あらためて平山家のタミと再婚させたという経緯がある。

しかし、九代目を継いだ長由が三十七歳で病死すると、今度はタミに暇を出して実家に戻した。そして、江戸に住む昌雄に帰郷して再度家督を継ぐようにと働き掛けたが、昌雄もまた一年も経たないうちにこの世を去る。

跡継ぎがいなくなった伊能家はそれ以降、親族、その中でも分家の七郎右衛門が中心になって家業を切り盛りしていた。

そのように身勝手な振る舞いを積み重ねておきながら、娘のみつが一人前に育った途端に、今度は跡取りになって婿を取れ……という要請である。

タミは、「お家が大事」ということはよくよく理解していた。しかし、余りにもご都合主義が過ぎる伊能家のやり方には反感を抱かざるを得なかった。

それから数日が経った朝、みつとタミは使い慣れた家具や身の回りの品を馬に載せ、三人のお付きと共に佐原村に向かった。季忠は、わが子と分け隔てなく育てたみつとその母を送り出すに当たっては、祝いの品を数多く持たせてやりたいと思った。しかし、平山家からみつを嫁に出すという話ではない。本来ならば伊能家で暮らしている筈の母娘が、自分の家に戻るだけのことである。その筋を通すためにも、荷物は日々の暮らしに必要な物だけに絞り込んだ。もちろん、みつもタミも十分に納得した上での対応である。

村一番の素封家で名主の季忠、その妹と姪の門出にしては余りにも質素な旅支度であったが、季忠は商家の家督を継ぐ姪に餞（はなむけ）として新しい名前を考えていた。伊能家の更なる繁栄と隆盛を成し遂げられるようにという意を込めた『達（みち）』という名であった。父のように慕ってきた

伯父、しかも漢学や儒学を学び、自らも俳句や和歌を詠む季忠が付けてくれた名前である。みつもその母も、贈られた名を喜んで受け容れ、住み慣れた屋敷を後にした。

この中村郷の南中村を出立した日から、みつは伊能達（みち）としてその一生を過ごすことになった。

二、

達（みち）とその母が佐原村に戻って二年ほど経ったころ、中村郷の平山邸に十二、三歳の少年が出入りし始めた。小柄で神経質な顔立ちをした少年の名は三治郎（後の伊能忠敬）。二里（八キロ）ほど離れた小堤（おんずみ）村（現在の横芝光町）の神保家から一人で歩いて来たのである。

三治郎が日本寺（にちほんじ）に近いこの屋敷を訪ねる理由は、主（あるじ）の季忠にいろいろなことを教えて貰えることであった。漢学や儒学はもとより、湯島聖堂で最新の知識を学んでいる季忠の話は何をとっても心が躍るようで、三治郎は楽しくてたまらない。加えて、小堤村の家では最近父が後妻を迎え、居心地がすこぶる悪かった。突然やってきた見知らぬ女が、母親気取りで家に居座っていることは耐えがたい苦痛であった。

三治郎が平山邸に来るようになって何度目かのことである。季忠が話を切り上げ、「そろそろ帰る時間だな」と水を向けても三治郎は動かない。それどころか、「家には帰りたくない」と言って眼に涙を浮かべている。その追い詰められた少年の心を察して、季忠は奥の八畳間に三治郎を連れて行き、「今夜はここに泊まっていきなさい」と言い渡した。そこは伊能家に戻ったみつとその母が暮らしていた座敷であった。

季忠はその時、思い付きで三治郎を家に泊めた訳ではなかった。そもそも三治郎が平山邸に出入りするようになったのは、少年の伯父である神保宗載（しゅうさい）に連れられて来たことに始まる。小堤村の神保家は、季忠の祖母の実家である。

神保家の家督を継いでいる宗載は、『梅石』と称して地方俳諧の師匠格であり、季忠とは心の通い合う文学仲間でもあった。

日ごろから親交のある宗載が「折り入って頼みが」と切り出したのは、三治郎の行く末についての相談であった。

「この子は頭が良くて大人を凌ぐほど知恵も回るんだが、少し変わっていましてな。普通の子のように育てても、うまくゆきません」

「ほう、それは興味深い話ですな。もう少し詳しく聞かせてくれませんか」

そう言って身を乗り出す季忠に、宗載は三治郎の性格や最近の暮らしぶりを話し始めた。

三治郎は延享二年（一七四五）一月十一日に、九十九里浜にある小関村（現在の九十九里町）に生まれた。生年月日に一が三つ並ぶので、「三治郎」と名付けられたという。生家は「小関」の姓を名のる土地の開発者で、大地主であると同時に当時は数が少なかった地引網を所有する名主でもあった。

三治郎の父 貞恒は、小堤村の神保家から婿に入った宗載の弟で、母の峰は小関家の長女である。この地方では「姉家督」といって、長子が女であった場合には婿を取って家督を継ぐことがよく行われていたが、峰と貞恒もそのような結びつき。夫婦は仲も良く、二男一女に恵まれ幸せな暮らしが続いていた。しかし、三治郎が満年齢で六歳になった時、母の峰が流行りの病で急死してからは、家族の状況は一変する。

小関家の跡取り娘が病死したとき、長男の貞詮は十四歳、もう家督を継げる年齢に達していた。その貞詮に家督を継がせ、父は後見人になるのが普通の流れである。しかし、小関家には峰の弟の五郎左衛門がまだ独立せずに同居していた。小関家の舅や親戚筋は弟の五郎左衛門に家督を

継がせたい。そして、寡夫となった貞恒には実家に戻って貰いたい……と考えたのである。

その背景には、地引網で大量のイワシを獲り、「干鰯（ほしか）」という肥料を作る生臭い家業と、文芸肌の貞恒の性格がしっくりしないことにあった。村の名主で網元でもある小関家の今後を考えると、貞恒は好ましい跡継ぎではなかった。

貞恒は兄の宗載と同様に文人肌で、俳号を「都船（とせん）」と称して佐久間柳居（松尾芭蕉の系譜）に入門していた。その貞恒にとって、大勢の漁夫に地引網を引かせ、獲れたイワシを水洗いして天日で乾燥、麻袋に詰めて出荷する仕事は肌に合わず、何かと口実を作っては浜の仕事場から逃げ出していた。

峰の葬儀が一段落したとき、貞恒は親戚の代表だと言う男から話し掛けられた。

「こんな時に話しにくいことだが、跡取りの峰がいなくなってはお前さまもここには居づらいだろう。これを機会に、小堤村に帰ってはどうかな」

「エッ、小堤に？」

「ああ、この小関家には五郎左衛門がいる。彼は仕事熱心で使用人からの信望も厚い。この家の舅や親戚はみんな、彼に跡を継がせた方がいいという意見だ」

そう言われると、貞恒には返す言葉がなかった。長閑（のどか）であった小堤村と違って、荒くれた漁夫が多いこの土地には馴染むことが出来ず、婿に来てから家業に熱心に取り組んだ記憶もない。

貞恒はウマが合わない小関家を出て、小堤村の実家に戻ることに渋々ながら同意した。

「分かってくれて有難い。それではもう一つ、お願いしたいことがあるんだが……」

「何でしょう？」

「ご承知のように五郎左衛門には子供がいない。一応養子を取ってはいるものの、小関家の血筋が絶えることは忍びないので、三治郎を置いていって欲しい」

「三治郎を養子に！」

「ああ、お前さまも幼子を抱えていては身動きが取れんだ

ろうし、三治郎が成長した暁にはこの家の跡継ぎになれる」
「本当ですか、三治郎を跡取りにするんですね」
「ああ、三治郎にとっても良い話ではないか。まだ七歳になったばかりだ、すぐに峰の弟夫婦になついて、実の子のように育つさ」
貞恒はしばらく腕組みをして考えた。彼には三人の子供、長男の貞詮と長女の房（ふさ）、それに三治郎がいた。
――ここを出たら実家に身を寄せるしかないが、子供の数は少ない方がいいに決まっている。しかも、三治郎の将来を考えると御の字かも……。
虫のいい小関家の言い分には少し腹立たしさもあったが、貞恒はあまり時間を置かずにその話を受け入れた。そして、半月ほど経った日の明け方に、まだ眠っている三治郎を残して貞恒と貞詮、房の三人は小関家を出て行った。
陽が昇り座敷がすっかり明るくなったとき、三治郎は目を覚ました。隣に寝ていた兄と姉、隣室で寝起きする父の姿がない。台所に回り、忙しそうにしている五郎左衛門の妻に訊ねる。
「父さんはもう出掛けたの？　それに兄ちゃんも姉ちゃんもいないよ」
「お早う、三治郎。お父さんたちは用事があってね、しばらく小堤村のお家に行っていますよ」
「すぐに帰ってくる？」
「そうですね……」
叔母は、それ以上は答えられずに口をつぐむ。三治郎は、父たちがすぐに帰ってくるものと思い朝食を食べ、家の近くで遊んだ。しかし、翌日になっても、翌々日になっても父たちは戻ってこない。数日が過ぎた時、三治郎は何かが変わったことを察知して、叔父と叔母に問いただす。
「父さんたちはいつになったら帰ってくるの？　それに兄ちゃんや姉ちゃんたちの持ち物もないよ」
五郎左衛門とその妻は互いに顔を見合わせた。たまたまその日は荒天のため地引網漁を取りやめたため五郎左衛門も家にいた。幼い子供とはいっても何時までも騙し続けるわけにはいかない。
「三治郎、よく聞いておくれ。父さんや兄ちゃんたちは小

堤村の家に帰ったが、お前はこの家の子、私たち夫婦の子供になったんだよ」
「えーッ、叔父さんの子！」
「そうだよ、いずれお前が大きくなったら、この小関の家を継ぐんだ」
「でも、一人はいやだ！」
三治郎の目から涙が溢れて頬を伝い落ちた。泣き声を必死に抑えている三治郎に、叔母がやさしく話しかける。
「母ちゃんも父ちゃんも急にいなくなって寂しいだろうけど、これからは私がお前の母ちゃん、五郎左衛門が父ちゃんですよ」
三治郎は仕方なく頷き、溢れた涙を手で拭った。しかし、心の中では眼の前にいる夫婦を父母と思うことなど到底できない……と思った。
それから数日が経ったとき、三治郎は叔父夫婦の前で不満げに呟いた。
「詰まんないな、本当の父さんがいないと本も読めないし習字もできない」
「そうか、三治郎は絵本や習字が大好きだったな。それなら寺小屋に通ったらいい。早速、知り合いのお坊様に頼んでみよう」
そう言い残して、五郎左衛門は刻み煙草と煙管（きせる）を持って家を出た。
翌月から三治郎は近くの寺小屋に通い始めた。しかし、漢学に長け文芸を好む父の貞恒と同じようにうまく教えてくれる師匠はいなかった。加えて三治郎は、同年代の子供とは比べようもなく知能の発達が早かった。寺小屋が用意した子供用の仮名本をすらすらと読み、筆を持たせると手本の平仮名を正確に書き上げる。
そして、師匠が目を離した隙に、棚に置かれた四、五歳も年長向けの読本を手に取って表紙を開いた。
「これこれ、三治郎、これはもっと大きくなってから」
そう言って、師匠は彼の手から読本を取り上げてしまう。仕方がなく三治郎はぼんやり外を眺めながら寺小屋が終わるのを待った。
家に帰っても三治郎の居場所はなかった。かつては末っ子 三治郎の天下であったわが家、そのかけがえのない家

が、母の死を境に、「他人の家」にとって変わってしまったのである。

感受性が飛び抜けて鋭い三治郎は家にいるのが辛くなり、外に飛び出した。そして、近くを流れる作田川の堤防を半里ほど歩き、海岸に建てられた浜納屋に入った。地引網や獲れたイワシを入れる桶などを格納してある漁具の置き場である。その人気のない納屋の隅で三治郎は涙が乾くまで泣いて過ごした。

秋になると暮れ六ツ（夕暮れ時）が早い。夕飯を済ませた三治郎は家人の目を盗んで外に出た。そして満天の空を見上げた。誰であったか定かではないが、多分、母の葬儀に来た父の友人に違いない。「母さんは星になったんだ、いつも真北に輝く北極星がお前の母さんだよ」と教えてくれる人がいた。その言葉を信じた訳ではなかったが、三治郎は夜空の星を眺めていると、心が少し和んだ。

一年が経ち、二年が過ぎても三治郎の態度に変化は見られなかった。それどころか、画一的な寺小屋での勉学に嫌気がさしたのか、朝に家を出ても寺小屋には行かない。作田川の岸辺を海に向かい、浜納屋に籠って好きな本を読んだり物思いに耽ったりして一日を過ごしていた。

その三治郎を見て、地引網を引く漁夫や小作人、さらには村人たちも悪い噂を囁くようになった。

「跡取り娘が死んだ途端にひどい話じゃないか、新しい名主は年端のいかない三治郎を浜納屋の番人にしている」

養子にもらった当初は、すぐになつくだろうと思っていたが、三治郎は何時まで経っても他人行儀、親子らしい会話も交流もまったく見られない。言いつけた手伝いなどは渋々やるが、それが済むとサッと姿を消してしまう。

家督を姉夫婦から継いだ五郎左衛門は、三治郎の養育の難しさを思い知らされ、将来にまったく希望が持てなくなってきた。加えて村人の悪い噂を放っておくわけにはゆかない。名主というのは村の取り纏め役で、年貢の徴収や公共の工事など、あらゆるところで村人の協力を得なければやってゆけない。その重責を担う小関村の名主が、幼児の虐待をしているとなれば、名主としての地位や名声も危うくなる。

五郎左衛門は三治郎が満十歳になった時、小関家の跡継ぎとして育てることを諦めざるを得なかった。そして、四

年前に小堤村に戻った父　貞恒の許に三治郎を帰すことにした。

三治郎は生まれ育った小関家を出て、小堤村の神保家に身を寄せる父の許に向かった。しかし、実の父　貞恒の家でも居心地の良い場所は見つからない。

神保の本家は伯父の宗載夫婦に三人の子女がいて、嫁取りをした長男には幼い子が二人いる。合わせて八人もの大家族で、父たちは本宅の脇にある納屋を改造した部屋に住んでいた。その狭い家に三治郎が加わると、家族の暮らしはさらに窮屈なものになった。

その上、四年ぶりに会った兄や姉は見知らぬ人のように変わっていた。兄の貞詮は十八歳、姉の房は十五歳になり、別れた時のイメージは残っていない。父の貞恒は容貌こそ変わらないものの三治郎と向き合うことは殆どなかった。私塾を開いて生計を立てていたが、仕事がない時には書物を読んだり、句会と称して出掛けてしまったり。そのような父を、三治郎は父親として受け入れることが出来なかった。むしろ自分を見捨てて小関家を出て行った人、という恨みに似た気持ちが拭えなかった。

小堤村に来てから一ヶ月ほど経ったとき、三治郎は狭苦しい家にいるのが嫌になって外に出た。足は自然に西に進み、親戚の伊藤家に向かう。伊藤家は神保家の大伯母が嫁いだ先で、一里ほど離れた中台村にあった。

三治郎が伊藤家を訪ねたのは、小堤村に戻されてきた直後のことである。父の貞恒に連れられて挨拶に行ったのが最初であった。門構えの立派な家には大伯母の長女である千世と夫の清三郎がいて、三治郎たちを温かく迎え入れる。三治郎が大人びた声で挨拶をすると清三郎が応じた。

「三治郎は小関村の生まれか。私もすぐ近くの栗生（あお）村から来たんだ」

清三郎は開口一番に出身地の話題を出した。彼は栗生村の飯高家から姉家督の流れで婿に入ったのだと言う。

「エッ、小父さんも浜の村から来たんですか」

「そうだよ、浜ではイワシを一杯獲っていたなあ」

「僕も浜納屋にいることが多かったから、手伝いは一杯し

たよ」

三治郎は初対面とは思えない親しみを感じ、清三郎に色々なことを話した。二人のやり取りを妻の千世は温かく見守り、饅頭や駄菓子を出してもてなしてくれた。

その時の嬉しさや楽しさが忘れられずに、三治郎は中台村へと足を早める。半時（一時間）ほどで伊藤家に着くと千世が笑顔で迎えた。しばらくして、村の見回りから戻ってきた清三郎も三治郎に笑顔で話し掛ける。

「よく来たな、道に迷うことはなかったか？」

「僕は一度歩いた道は忘れません、どんなに遠くっても」

「そうか、もの覚えが良いんだぁ。ところで、今日はどうした？」

「いえ、何もないけど、ただ小堤の家が……」

清三郎は三治郎少年の悩みをすぐに察知した。

「そうか、三治郎も気苦労が多くて大変だな。だがなあ、今の暮らしが何時までも続くという訳ではないのだよ」

代々名主の伊藤家に婿入りした清三郎はこのとき二十一歳、少年の鬱憤（うっぷん）をただ聞いてやり、そのあとで、苦境に負けずに勉強をして、将来を自ら切り拓くようにと諭した。そして、心の内を聞いてもらえた三治郎は気分を取り直して、日が暮れる前に家路についた。

三治郎の家族が身を寄せる神保本家は里山の裾にあり、玄関は広大な田園に面していた。里山や広い庭で鳴く蝉の音が盛りを過ぎて暑さも和らいでくると、田圃の稲穂が首を垂れ始める。そのタイミングを見計らって、神保家に幕府の代官が二人訪れた。彼らは稲の実り具合を視察しながら、小堤村の年貢を決めるためにやって来たのである。

代官は少しでも多くの年貢を取りたいのだが、年貢を集める立場にある名主の宗載は出来るだけ少なく抑えたい。両者は真っ向から対立するが、双方が納得するまで、代官は神保家に泊まり込みで作業に当たった。

年貢の石高は、江戸時代の初めまでは検見法（けみほう）というやり方で取り決めていた。村の田圃の複数個所で坪刈りというサンプリングをして、それらによって得られた実績を元に村全体の年貢を算定した。しかし、この厄介な方法は正徳

三年（一七一三）に幕府から廃止の方針が打ち出され、徐々に定免法（じょうめんぽう）に変わってゆく。過去数年間の率から推定した年貢率をあらかじめ設定する方法である。決めた率は五年か十年間が期限で、終わると農民側からまた率を願い出るという形式を取り、以前より少し高く設定されるのが普通であった。

小堤村でも五年前から新しい算定法で年貢の率を決めている。その率は五割六分で基準となる石高（こくだか）は四〇〇石（こく）。その四〇〇石を基準にして、これまでの五年間は二二四石であった。

代官が着いた晩には盛大な宴が開かれて、小堤村の主な地主が遠来の客をもてなした。翌朝から名主の宗載と弁のたつ地主の代表が代官たちとの折衝に入った。好奇心の強い三治郎は四人から少し離れた位置に座り込んで、成り行きを興味深く観察していた。宗載は、大事な仕事を始めるのだから家に戻るようにと三治郎に言った。しかし、森覚蔵という代官は、「子供のことだ、すぐに飽きるだろう」と宗載の言葉を制して三治郎の同席を認めた。しかし何時まで経っても、三治郎少年は大人たちの作業を熱心に見詰めている。

「宗載殿、ご承知かと思うが、これまでの五割六分は低すぎる。定免法は初めての試みということで手心が加えられていたが、今後は六割ぐらいに引き上げたい」

「お武家様、滅相もないことを。五割六分でも私ども百姓にとっては重すぎる年貢でございます。そうだよなぁ宗載殿」

「この者の申す通りです。これからも何とか同じ率でお願いを」

宗載たちは代官にひれ伏して、何とか年貢の引き上げを阻止しようと努める。

「お主たちの言い分は分からんでもないが……。では、過去の収穫に基づいて決めようではないか」

「どういうことでございますか？」

「ここに過去十年分の年貢を記録した帳面がある。この一〇年間の平均から誰が見てもおかしくない率を算定しようではないか」

そのやり方に了解を取り付け、代官は文書に記された石数を算盤に入れて計算を始めた。二人掛かりで、慎重に計算を進めている。

まず六年前が二二〇石で五割五分、七年前が二四〇石で六割、その前年は凶作だったので二〇〇石、五割という具合に十年分の率を算盤の右端に足してゆき、足し算が終わるとその和を一〇で割る。その結果は五割七分八厘になった。

「宗載殿、五割七分八厘になったが、これに二厘を足して五割八分ですな」

「二分も増える！　昨年より一分増しの五割七分という訳にはまいりませんか」

「いや、毎年上げろというのが御上からのお達しで、引き下げは出来ぬ」

「しかしお武家様、七年前の六割は大豊作の年のこと、これは外して貰わないと」

「分かった、突出して多い年を除けと言うなら凶作だった五割の年も外さなければ公平にならん、分かりますな」

「はあ、そうなりますかね」

「それではこの記録から二つの年を除外して計算し直すことになるが、ワシ等はもう草臥れた。明日にしようではないか」

「あのう、その計算は僕にやらせてください」

朝からずっと代官たちの作業を見ていた三治郎が口を挟んだ。

「エッ、この面倒な計算を！　お前は幾つになるのだ？」

「十一歳です」

「ハハハハッ、無茶なことを言うではない」

「でも、毎年の年貢を率に直して、その平均を出せばよいのでしょう」

「ほう、計算法が分かるのか。それじゃやってみろ」

代官は三治郎をからかうつもりで算盤を渡した。その算盤を手にすると、三治郎は素早く毎年の年貢を率に換算して算盤の右端に置き、次の年の率を足す。さらに次を足し、突出した二年を除く八年分の総和を算定。次にその数値を算盤の真ん中に移して、今度は八で割りはじめる。瞬く間に計算を終えた三治郎が言う。

「五割七分九厘です」
「ほう、宗載殿、本当にこの子は十一歳なのか？」
「はい、私の甥ですが、算術が得意のようで」
「いやいや、こんな子は初めてだよ。それにしても見事じゃ。もう一度答えを言ってみよ」
「はい、五割七分九厘です」
「そうだな、前の計算と一厘しか違わないな」
代官は宗載たちの顔を見て、勝ち誇ったように笑う。
「どうも、算術に長けた人には敵いませんな」
「それではこれから先の五年間は五割八分、小堤村の年貢は二三二石ということで一件落着じゃ」
代官は満足げに取り決めた率を帳面に書き込み、広げた文書を片づけ始めた。
「それにしてもこの子は凄い、名を聞かせてくれぬかな」
「ハイ、三治郎と申します」
「そうか、宗載殿、ワシの知り合いに名高い算術の師匠がいる。もしこの子が望むならば、紹介してやるぞ」
「はッ、それは有難いお話ですが、この子の親の意見も聞かなければ……」
「そうだな、もし弟子入りしたいということであれば、いつでもワシのところに連絡をするように」
森 覚蔵という代官は三治郎がすっかり気に入ったのか、「出来ることなら江戸に連れて帰りたいものだ」というような話をしばらく続けた。

三治郎が小堤村に戻った二年後に父の貞恒が後妻を迎えた。納屋を改造した狭い家は窮屈で居心地が悪い。そこに新しい母だと名乗る女が入ってきたのである。感受性の鋭い三治郎はいたたまれずに本家の客間に逃げ込んだり、親戚の家を訪ねたりと、殆んど自分の家には寄り付かなくなってきた。
それを見かねた本家の宗載は、「このままでは三治郎は駄目になる。人一倍優れた知能や資質を伸ばすことは到底できない」と強く感じた。そこで頭に浮かんだのは平山季忠である。彼は利根川流域の村々に知れ渡る名名主で藩の役人、さらには江戸の学問所にも通っている文化人である。加えて、神保家とは親戚であり、かつ文学の仲間同士でもあった。

宗載は、まず弟の貞恒を本家に呼んで言い含めた。

「三治郎をここで育てることには限界がある。お前もそれはよく判っているな。そこで南中村の平山季忠殿に頼もうと思うのだが、どうであろう。季忠殿であれば、三治郎のような子供でも育てる術を知っているに違いない」

「兄上、あの子にはほとほと困っていたところです。そうしていただければ、私としても有難いことです」

「よし、決まった。明日にでも中村郷に行って季忠殿に頼んでこよう」

そのような経緯で、神保家は三治郎の行く末を平山季忠に相談することになった。

三、

三治郎が生まれた時代には豪農や素封家の次男、三男が家を継ぐことは難しかった。分家を出すと農地や財産が目減りして、代を重ねるたびに衰退してしまうためである。三治郎の場合も同じで、他家の婿養子になるか僧侶ないしは医者になるしか道はなかった。神保家の当主である宗載から三治郎の育成を委ねられた季忠は、まず少年を僧侶にすることを考えた。

それというのは、平山家は日蓮宗とのつながりが極めて強く、現に弟の「日敬」が日本寺に入り檀林で法華経の奥義を説いている。菩提寺は六、七町北にある浄妙寺で、この寺の九世「日瞬」、十二世「日充」（中村檀林八世・後に除名）さらに十四世の「日寛」など僧門に入った先祖も多い。それらの中には「不受不施派（ふじゅふせは）」の僧として八丈島と御蔵島に流刑になった「恵正」と「是相」のような人物もいた。江戸幕府は排他的な「不受不施派」を邪宗門として禁制にしていたためである。

三治郎を僧にするには中村檀林で修行させるのが一番であるが、彼はまだ十二歳になったばかり。成人するまでどこかの寺に預けて、仏法の基本を身に着ける必要がある。季忠は菩提寺の浄妙寺や知合いの寺を考えたが、小関村で寺小屋を嫌って拒否した、ということが頭を過（よぎ）った。三治

郎のような少年は知的刺激を求めて深く学ぼうとするが、自分の気に入った学習方法で、自分の興味のある分野でなければそっぽを向いてしまう。案の定、季忠が浄妙寺や親しい寺を勧めてみると、三治郎は頑として首を縦に振らない。

――この子にはきっかけや動機が要る、頭ごなしに修行をしろと言っても素直に従うような子ではない。ではどうしたらよいのであろうか……。

「そうだ、算術、大人が顔負けするほどの技量を示して幕府の代官を驚かしたという算術だ！」

それに気付いた季忠は直ちに動いた。下総の利根川流域から常陸（茨城県）の霞ケ浦、北浦周辺まで顔が広く、親戚や知人が多い彼は書状を何通も認める。算術に長けた和尚のいる寺はないものか、あったら即刻教えて欲しいと。

一ヶ月ほど経って、常陸の国に「和算に長けた住職がいる」という情報が入った。ただ、季忠には気になることが一つある。日蓮上人が誕生したのは安房（房総半島南端地域）であり、それに連なる上総、下総では日蓮宗が圧倒的な勢力を誇っていた。しかし、隣国の常陸となると状況が異なる。調べてみると、やはり和算に強い住職がいるという寺院は日蓮宗ではなかった。

季忠は宗派の異なる寺に三治郎を預けることに抵抗を感じた。平山家はもとより目と鼻の先にある檀林からは修行僧の読経や議論する声が聞こえ、数百人に上る修行僧たちも家の周辺で暮らしている。そのような状況の中で、日蓮宗以外の寺院と関わりを持つことには、少し勇気がいる。

それでも彼は寺の名を伏せて三治郎に言った。

「三治郎、常陸の国に和算に長けた坊さんがいるそうだ」

「ほんとうですか？」

「ウム、算術の好きな若者たちが教えを乞いに集まってくるらしい」

「面白そうですね」

「そうか、興味があるなら連れて行くぞ」

「是非、お願いします」

季忠の狙いは見事に当たった。早速、寺を紹介してくれ

た知人に入門の手続きを頼み、寺の住職に宛てた書状を認めて三治郎に持たせる。そして、最も信頼できる使用人の一人に寺まで連れて行くようにと命じ、季忠は日本寺が建つ高台で三治郎を見送った。

それから半年も経たないうちに、寺の住職から一通の文（ふみ）が届いた。季忠は何事かと達筆の文字を目で追う。

「三治郎を小坊主として預かり、仏法の修業とその合間に和算を教えたが、和算の方は熱心で瞬く間に師匠の力量を超えた。しかし、肝心の仏法の方には興味を示さず、修行も嫌々ながらの取り組みで、進歩がまったく見られない。このまま寺に預かっていても僧侶として大成する見込みはなく、和算に関しても拙僧が教えることはもう何もない」という内容であった。

季忠は「残念！」と思うと同時に、「やれやれ」という安堵に似た気持ちを抱いた。もし三治郎が、仏法に熱心で僧侶になった場合には平山家や周囲にとって異教徒となってしまう。成人後に日蓮宗に改宗させることは極めて困難な作業になるであろう。

だが、季忠にはそれ以上に三治郎を僧侶にするのは「惜しい」という思いがあった。季忠は湯島聖堂の学問所に長年通っており、卓越した人物やその可能性を秘めた若者を沢山見てきた。三治郎はそれらの人物と比べても引けをとらない才気があるし、常人では想像もつかないような言動や行動で周囲を驚かすことも共通している。

「あの子はやはり医者か学者かな……」

そう呟きながら季忠は筆を執り、今までのお礼と迎えの者を寺に差し向ける旨の返書を書き始めた。

体よく寺を追い出された三治郎がお付きの使用人と共に戻ってきた。旅支度を解き、かつてタミとみつが暮らしていた座敷に落ち着くと季忠が入ってきた。

「おかえり三治郎、常陸からの長旅は疲れたであろう」

「いえ、北浦から佐原村までは舟でしたから、一向に」

「そうか、それは頼もしい。ところでお前は本当に学問が得意のようだな。寺の住職も算術ではもう敵わなくなったと知らせてきた」

「はい、ずいぶん勉強をしました。しかし、和尚から学ぶことはもう何も……」
「そうらしいな。では次はどうする……。ワシはな、三治郎は医者に向いていると思うが、どうだろうか」
「医者ですか？　でも医者って何をするのかよく分かりません」
「医者はなぁ、病を未然に防いだり治したりする仕事だが、そのためには人一倍勉強をして常に最新の知識を身につけなければならない」
「お坊様よりも？」
「そうだよ。お坊様は仏法中心だが、医者は学ぶことがとても多い。人の体と心のこと、病気の見立てや薬の使い方とか、何でも知っていないとな」
「ということは、勉強がたくさんできますね」
「そうだとも。だから三治郎には向いていると思うよ」
　知的好奇心が旺盛な三治郎は、季忠の新たな提案に身を乗り出した。まだ幼さが残る顔が輝き、眼がキラキラとしている。
「よし、決まった。親戚に藩医といってな、多胡藩お抱えの医者がいるから、明日にでも頼みに行こう」
「よろしくお願いします」
　季忠は、喜ぶ少年を我が子のように暖かく見つめながら、座敷を後にした。

　翌日、季忠は日本寺が建つ高台から坂道を下り陣屋の近くに住む藩医を訪ねた。陣屋には月に何度も顔を出しているが、少し年上の藩医に会うのは久々のことである。幸いなことに、藩医は書斎でくつろぎ、書物に目を通していた。
「これは　これは　季忠殿、お久しぶりですな」
「すぐ近くまで来ていながら、すっかりご無沙汰をしております」
「ところでご用件は？　お元気なように見受けますが、ご家族ですか？」
「いやいやみんな息災です。今日はちょっと込み入ったお願いがありましてな」
「ほう、何でしょう？」
「実は、ウチの祖母の実家、小堤村の神保家に優秀な倅（せがれ）

がおりましてな、名は三治郎というのですが」
「ほう、歳はいくつに？」
「十二歳。飛び抜けて頭はいいが一筋縄ではいかない子でして。最初は僧侶にしようと寺に預けたのですが、半年も経たずに暇を出されてしまいまして」
「神保家の次男か三男ですかな？」
「それが、当主の弟の次男です。当主は宗載と言いますが、その宗載殿の甥の身の振り方を頼まれましてね」
「それで医者にしたい……というご相談ですかな」
「お察しの通りです。ウチの屋敷から通わせてもよいので、何とかお頼み申します」
「季忠殿に頼まれては嫌と言えませんが、先ほど難しいところがある子だと」
「そうなのです。学問熱心で物覚えも良いのですが、押しつけは駄目ですな。本人が納得するまで、時間を掛けないと聞き入れません」
「ウム、その辺は心配ですが、お引き受けいたしましょう」
「それは有難い、本人も喜ぶことでしょう」
「あまり期待はして下さるな。私に医者を育てる技量があるか否か、自信がありませんのでね」
親戚の藩医は三治郎の育成に不安を抱いたものの、季忠からの依頼をすんなりと受け入れた。

三治郎の進路が大きく変わろうとしている最中（さなか）に佐原村から訃報が届いた。ミチの夫である伊能景茂（かげしげ）が二十歳の若さで病死したというのである。季忠は寡婦となったミチとその母が心配で、翌朝早くに佐原村に向かった。
――それにしても何ということであろうか。季忠の妹のタミは嫁いですぐに夫に死なれて平山家に戻されてきた。そのときタミが抱きかかえていた乳飲み子のミチもまた生まれたばかりの嬰児を残して夫に先立たれるとは……。
彼は妹と姪の母娘がまったく同じ悲運に見舞われる不思議を感じながら、里山に沿った街道を急いだ。
通夜と葬儀は伊能家の親戚が中心になって執り行われた。悲嘆にくれるミチも気丈に振る舞い、要所では喪主としての務めをしっかり果たしている。わずか十六歳で、し

かも産まれたばかりの嫡男 景茂を抱えて未亡人となったミチの喪服姿に涙する参列者も多かった。

翌日、季忠は遅れて佐原村入りしていた妻や親族と共に帰路に就いたが、ミチとその母が心配で、草鞋（わらじ）と脚絆（きゃはん）で固めた足も重く感じられた。

季忠が次に佐原村を訪れたのは、ミチの亡夫の四十九日の時である。通夜や葬儀の時とは違って参会者の悲壮感は薄らぎ、法要が済んだ後の酒席も騒がしい。季忠も勧められる徳利の酒を盃に受けながら、独り残されたミチのことが気掛かりであった。

「まあ景茂殿が亡くなっても伊能家は安泰じゃ、豊秋（ほうしゅう）殿がいるからなぁ」

酔客の声が聞こえてくる。豊秋というのは分家の伊能七郎右衛門のことである。

「そうよ、亡くなった婿は何もしなかったし出来もしなかったからな」

近くに座った男たちが相槌を打つ。

「嫡男の忠孝は生まれたばかりの乳飲み子、今までと何一つ変わりなく……ということになりますな」

季忠は、聞くに堪えない話を撥ね返すように盃を一気に飲み干した。

――この家の親戚は亡くなった故人を悼む気持ちが微塵もない、それどころか本心では当主がいなくなって好き勝手ができるという口ぶりではないか……。

彼は、節操もないことを平気で口にする酔客たちに嫌悪を抱いた。そして、このような取り巻きの中で暮らすミチがますます心配になってきた。

季忠の懸念はものの見事に的中していた。法要が済んで親戚がすべて引き上げると、ミチが季忠の部屋にやって来た。

「伯父上、実は困っていることが……」

「何かな」

「あのう、母が……」

「んッ、タミがどうかしたのかい」

「母はここでも日蓮宗を捨てずに、朝夕は団扇太鼓を打ち

ながら法華経を……」
「そうか、タミは頑固なところがあるからな」
「その日蓮宗がいけないと、親戚から非難されていて……」
「まあ、宗派が違う人たちには愉快なものではないだろうからなぁ」
「それどころか、夫の景茂が急死したのも異教徒をこの家に入れたからだと」
「馬鹿な！　そんなことがある筈はない」
「私もそう思います。でも親戚の人たちは母を追い出せ、実家に戻せと言うのです」
「それは酷い話だな」
季忠は、どうしたらよいものかと腕組みをして考える。しかし、簡単に答えが出るような問題ではなかった。
「ここはミチ、お前が頑張るしかないな。私は妹をここに嫁がせた平山家の者だから、この家の揉め事に口を出す立場にはない」
「私が頑張るって、どういうことですか？」
「ウム、ミチは十四歳になったとき、何と言われた。伊能家の跡継ぎに、婿を取って伊能家を継いで欲しい、それが親戚会議での決め事だと言われたな」
「はい、その通りです」
「だからな、その言葉を逆手にとって強く出る。一歩も後には引かないことだ」
「そんなことが出来るものですか！」
「できないなら、親戚の言うことを聞くのかね」
「それはできません、苦労に苦労を重ねて私を育ててくれた母を、どうして見捨てることが出来ましょう」
「だから心を鬼にして、親戚の者たちに立ち向かうのだよ」
ミチは、しばらくのあいだ膝に揃えた白い手を見詰めて考えた。
――確かに力のある伯父にも解決できない問題である。ここは自分が頑張って母を守る、伊能一族の声を撥ね退けて母を守り抜くしかない……。
「分かりました、私が母を守ります。私はこの伊能家の跡取りですから」
「そうだミチ、人が生きてゆくには戦うことも大切だよ。たとえ悪（ワル）と言われ鬼と呼ばれても、理不尽なことに屈して

はいけない」
　季忠は覚悟を固めたミチを強く励まして、翌日、中村郷に帰って行った。

　このときを境に、ミチの生活態度が変わった。分家の豊秋たちが言うことを素直に受け入れなくなったのである。ある日の夕暮れ時、ミチのところに分家の豊秋がやって来て、酒の仕込み量や作業の進み具合を報告していた。そこに奥座敷から「南無妙法蓮華経」と団扇太鼓の音がドンドンと響いてきた。
「くッ、疫病神が始まったな」
「豊秋殿、今何と言われました！」
「いや何とも。ただあれは疫病神だから止めて貰いたいですな」
「豊秋殿、言葉を慎みなさい。そもそも貴方は分家の人間でしょ」
「それはそうですが、この伊能家は先祖代々真言宗でして」
「そんなことは百も承知しています。仕事のことは豊秋殿や親戚の方々にお任せしていますよ。しかし、私どもの家の中まで口を挟まないで下さい。無礼ではありませんか！」
　眉を吊り上げて言うミチに豊秋は驚いた。遥かに年下の小娘に「分家の分際で」と一喝されてムッとはしたが、ここで切れてしまっては負けである。
「確かにミチさんはこの家の跡取り娘、失礼を致した」
　豊秋はそう言って引き下がったものの、腹の中は納まらない。「年端の行かない小娘が何をぬかすか、今に見ておれ」と怒り千万で本家の門を潜り抜けた。
　幼い時から平山家で育てられたミチの言葉遣いには厳しいものがあった。彼女は、伯父の季忠が目下の侍や使用人を叱るのを見て育ったので、怒るときは一刀両断に切り捨てる。相手に反論や言い訳を一切許さない。そのような言葉を聞いたことがない伊能家の人々は、分家の豊秋が浴びせられたような叱責を受けると腰を抜かすほど驚いた。そしてあの嫁は長幼の序も知らぬ無作法な女、鬼のように怖い女と言い触らすようになってゆく。

　仕事のことはともかく家の中はミチが取り仕切るようになって一年、今は亡き景茂の一周忌がやってきた。季忠

は風の噂にミチの孤軍奮闘ぶりを聞いていたので、多忙な仕事を差し措いて佐原村に急いだ。利根川支流の小野川に面した広い屋敷には顔見知りになった伊能家の人々が集まってくる。それらの客を迎えるミチの傍をよちよち歩きの忠孝が歩き回り、参会者たちの関心を一身に集めていた。

法要が滞りなく終わり、酒宴が始まった。話題は故人を偲ぶより、嫡男忠孝の可愛らしさが中心になり、丈夫に育つようにと願う声が弾んだ。そして、一周忌の法要も過ぎたので、そろそろ跡取り娘のミチに後添えの婿を……と言う話になった。

「季忠殿はミチの伯父で、しかも父親も同然のお方。ここは顔の広い季忠殿にお願いして、良い婿を探して貰いたいものですな」

思いのほか座は和やかで、伊能家の親戚たちはミチの再婚を心の底から望んでいる口ぶりである。

「分かりました、伊能家にふさわしい婿殿を探してみましょう」

「お願いしますよ、私らは佐原村のことしか知りませんのでなぁ」

豊秋とその取り巻きに持ち上げられて、季忠は本気で婿を探す気になった。目の前に居並ぶしたたかな男たちと独りで戦っているミチを何時までも放って置くわけにはいかない、と思ったのである。

中村郷に帰り着くと、季忠はさっそく郷士や豪農のネットワークを駆使して婿探しに取り掛かった。二、三ヶ月後に朗報が入り、上総に豪農の次男がいるという。彼は忙しい仕事を後回しにして、上総の村まで足を運ぶ。十五歳になるという婿の候補は凛々しい顔立ちで身体も強そうである。二言、三言話してみたが、受け答えもしっかりしていて好感が持てる。「この男ならミチを幸せにしてくれる」と確信した彼は、伊能家の豊秋に宛てて丁寧な書状を書き上げた。

しかし、一ヶ月もしないうちに佐原村から返書が届いた。薦めてくれた婿は若過ぎる、それに農家の次男では酒造りや廻船業は手に負えないであろう……というものであった。

それから半年ほど経ったとき、多古藩に出入りする呉服屋に十八歳の倅がいて、三男なので婿に出したいという話

が耳に入った。陣屋からそう遠くはなかったので、出仕の帰りに足を伸ばしてみたが、立派な店構えである。日を改めて訪問し、店主とその息子に会ってみたが、婿の候補は仕事熱心で性格も良さそうである。

しかし、その婿の推薦状にも豊秋からすぐに返事があり、「家柄が違う、とても受け入れられる相手ではない」という断りの文が届いた。「親戚一同が集まり、話し合ったところ……」と書かれているが、それにしては早過ぎる返事である。季忠はミチの婿探しは思っていたよりも遥かに大儀な作業であることを思い知らされた。

四、

医者への道を歩み始めた三治郎は、平山家から藩医の許に通っていたが、漢字で書かれた中医（ちゅうい）（中国伝来の医学）の教本に馴染めずに戸惑っていた。

それに気付いた季忠は、「それでは、漢学を先に学ぶのがよかろう」と、漢学者の平山玄徳のもとに三治郎を預けた。この漢学の師匠もまた平山家の一族であるが、三治郎はのみ込みが極めて早く、瞬く間に難しい書物も読めるようになってゆく。

あるとき師匠の玄徳は、難解な一冊を三治郎に手渡して、「何が書かれているか？」と問うてみた。すると三治郎は中身をすらすらと説明して玄徳を驚かせた。

漢学の修得が一段落したところで、三治郎はふたたび藩医の許に戻ってきた。藩医は自宅でも診療をしており、三治郎はその手伝いをしながら医術の勉強に励んでいた。しかし、時おり「毎日が詰まらなくて……」と季忠にこぼす。中医はあいまいなところが多く、論理数学的な知能に長けた三治郎には合わないらしい。三治郎は次第に藩医から足が遠のき、太陰暦や太陽暦などの暦に関する学問に興味を抱き始める。月の満ち欠け、太陽と星の動きに強い関心を抱くが、幼少時から夜空を眺めて過ごしていた生い立ちが影響しているのかも知れない。そのような三治郎の行く末について、季忠は心を痛めていた。「僧侶が駄目で、医者も性に合わないとなれば、この子は一体どう育てればよい

ものか……」と。

折しも、季忠が通っている江戸湯島の学問所では、西洋の科学や医学に日々関心が高まっていた。幕府は鎖国政策を敷いていたが、例外として長崎の出島だけはオランダの帆船や商人が出入りしている。その長崎から西洋の珍しい物品が届けられ、新しい知見も伝わってくる。それらの潮流を無視することができなくなった幕府は、海外の情報に目を向け始める。将軍吉宗は医師の野呂元丈（げんじょう）とさつまいも先生で知られる青木昆陽（こんよう）に蘭学の習得を命じた。元文五年（一七四〇）、三治郎が生まれる五年前のことであった。

幕府の命を受けた二人は、毎春のオランダ商館長一行の江戸参府に目を付けた。そして二人は、一行が定宿にしていた長崎屋に足繁く通い、通詞（つうじ）（通訳）からオランダ語を本格的に学んだ。このとき青木昆陽（こんよう）が学んだ知識は前野良沢に伝えられ、やがて『解体新書』の翻訳へと繋がってゆく。

蘭学に目が向けられる世相の中で、中医一辺倒の医学の世界にも変化が起こり始めた。医学者の山脇東洋は中医における『五臓六腑説』に疑問を抱き、人間の体の中を直に見ようと試みる。彼は京都所司代に願い出て、宝暦四年（一七五四）に死刑囚の腑分けに立会い、その成果を『蔵志』という書物に纏めている。中医が説く解剖学等には、事実と異なる点が多々あることを指摘したのである。

そのような折に、「肥後（熊本県）の名家、阿蘇氏の末裔で、長崎で蘭学を学んできた」という医者が土浦にいるという噂があった。その話を聞きつけた季忠は、土浦に住む親戚を介して阿蘇氏に接触を試みた。新しい知識や学問を望む者にとって長崎遊学は垂涎の的であり、三治郎もきっと目の色を変えて飛びつくに違いない……と。

案の定、阿蘇氏のことを話してみると、三治郎は明日にでも土浦に行きたいと言い出した。そこで季忠は三治郎少年を座敷に正座させて言い含める。

「医者になりのならば少々辛いことがあっても我慢することだよ。途中で投げ出したりせずに、阿蘇先生の教えをしっかり学んでおいで」

「はい」

少年の意志が固いことを確かめて、季忠は三治郎の育成を阿蘇氏に頼み込んだ。

三治郎は蘭学を習い、西洋の医学を習得できるのでは…と胸を弾ませて中村郷を発った。途中の佐原からは船旅で、霞ケ浦の北岸に着くと平山家の親戚が出迎えてくれた。その男に導かれて、三治郎は目指す医院の門を潜った。

阿蘇氏の医院は大きな門構えで、出入りする患者も多かった。長崎で蘭学を学んできたという触れ込みが評判で、遠方からも患者が集まって来ているようである。三治郎は、白髭を生やした、いかにも「名医」といった風情の医師に引き合わされた。診療の合間の短い面談で三治郎の弟子入りが決まり、施術室に隣り合った八畳間が当てがわれる。彼はその座敷で寝起きをして、まず医院の下働きから始めた。やがて三治郎は施術室への出入りが許され、白髭医師の診療の手助けをするようになる。

しかし、阿蘇氏の見立てや施薬は、以前修行をしていた多古の藩医のそれと大差はなく、中医そのものと言ってよかった。中医以外の蘭学や西洋の医学らしいものは何も出てこない。それでも三治郎は、「長崎の出島に遊学した者でなければ知り得ない蘭学を、そう簡単には教えてくれる筈はない……」と阿蘇氏の仕事を助けて、その教えが受けられる日を辛抱強く待った。

土浦に来てから、もうすぐ一年になろうとしていた。湯島聖堂に通っている季忠からは、「オランダ語の文字は横書きで、漢字とは似ても似つかわない」と聞かされてきた。もし白髭医師が蘭学を習得してきたというのであれば、横文字の書物が一冊や二冊あってもよいのではないか……。

しかし、白髭医師の書斎や施術室には中医の書物はあっても蘭学らしい本は一冊もない。三治郎の「そのうちにきっと」という気持ちは揺らいでゆく。

三治郎は次第に、「出島で蘭学を学んだという経歴は阿蘇氏の作り話では？」と疑い始めた。そこで彼は、患者が

いなくなったある日の午後、「ここに来て一年経ちましたが、そろそろ蘭学のことを教えていただけませんか」と単刀直入に訊いてみた。すると、白髭医師は「出島に行ったことはある、しかし、そこであいだに立った人間が蘭学の師にうまく取次いでくれず、門前払いになった」と言う。

騙されたことに気付いた三治郎は、その翌日にそそくさと荷物を纏めて、傷心の思いで南中村の平山邸に戻った。

「そうか、詐欺師のような医者であったか。まあ、気を落とさずにしばらくここで勉学をしなさい」

季忠は再び三治郎を元の八畳間に住まわせ、三治郎が藩内外の医師や学者の許で自由に学問ができるように手配をした。

三治郎に負けず劣らず学問好きな季忠は、最近江戸で盛んになってきた本草学（ほんぞうがく）に興味を持ち、暇があれば湯島に出向いていた。本草学というのは、中国伝来の薬物学で、薬になる植物・動物・鉱物の形態や産地、効能などを研究する学問である。幕府の鎖国制度の影響もあり、本草学は我が国独自の研究が進んでおり、彼は田村藍水（らんすい）という学者に弟子入りをしていた。

藍水の門弟の中には平賀源内がいて、日本全国から集めた植物等を展示する物産会（薬品会）を宝暦七年（一七五七）に湯島で開いている。源内が発案し、藍水主催で開催されたこの会は江戸における初めての試みであったが、その後も定期的に開催されるようになる。季忠は第五回の『東都薬品会』に下総で獲れた月日貝の『海鏡』を出品するなど、本草学や物産会にも熱心に取り組んでいた。

その季忠を通して入って来る江戸の情報、物産展に限らず、源内たちが長崎で学んでくるという新しい知識や学問等々の話を聞いていると、三治郎はいたたまれなくなった。

「季忠さま、私も江戸に連れて行ってください。もうこの辺では学ぶ師もいませんし、興味のある書物も手に入れることが出来ません」

「そうか、三治郎は覚えが早いからなあ……では、この次は共に参ろうか」

季忠はそう言って、次に江戸に出掛けるときには三治郎を伴うことにした。

湯島聖堂の学問所では儒学が基本になるが、それに加えて漢学や暦学、本草学など広い分野の専門家が切磋琢磨して学問に励んでいた。前出の平賀源内は最初の物産会を開催した年から林家に入門、聖堂に寄宿して本草学に取り組んでいる。

季忠は幼時より湯島聖堂に通い先代の大学頭信充（のぶみつ）に入門、その後、宝暦四年（一七五四）に大学頭を継いだ林鳳谷に師事している。季忠は、三治郎を自分の師である鳳谷に引き合わせた。

三治郎が真っ先に選んだのはやはり算術であった。彼は二次・三次方程式の解き方や円周率の求め方など、最先端の知識を熱心に習得してゆく。算術に関連した天文学と暦学にも関心が高く、彼は林家が蓄積してきた膨大な書物を、むさぼるように読み漁った。その三治郎の熱意と卓越した才能は、大学頭の鳳谷も刮目するところとなり、大きな期待を寄せられるようになってゆく。

季忠は三治郎と共に湯島で学ぶことを至福の時としていたが、生業（なりわい）をおろそかにするわけにはゆかない。数日の滞在で区切りをつけて中村郷に戻って来る。そして、稲の生育状況を見て、小作人に必要な指示をしたり自ら農作業の監督をしたりする。また、農閑期であっても水路の修理や土地改良などの仕事が山積していた。さらに陣屋から呼び出しがあれば出仕して、藩主に命じられた業務をこなさなければならない。

ある時、土地の改良工事をしているさなかに、多古藩の陣屋から急な呼び出しがあった。予定していた工事は、農閑期でも沼状態にある水田に暗渠を埋設して、水はけをよくする作業である。具体的には湿地に二～三尺（六〇～九〇㎝）の溝を幾筋も掘り、木の枝や細竹を束ねた粗朶（そだ）を埋め込む。その結果、水はけが良くなった田では米の収穫量が上がり、農作業も格段にやりやすくなるのである。

その朝も工事現場には二〇人ほどの農夫が集まり、雇い主の季忠の指示を待っていた。しかし、現場に出られない季忠は仕方なく三治郎に工事の概略を話して、監督を委ね

た。

当時は一四、五歳で一人前の大人と見做されてはいたが、年端のいかない三治郎が何歳も年上の農夫たちを指揮し、監督するのは難しいことである。季忠は「無理なことは百も承知、工事が一歩も進まなくても構わぬ」と腹を括って陣屋に急いだ。そして、日没が近い暮れ六つ頃に工事現場に行ってみると、そこに人影はなく、予定した工事もきれいに仕上がっている。屋敷に帰ると、三治郎は自室で読書に耽っていた。

季忠が仕事のことを問うと「半時(一時間)前にすべて終わり、農夫たちはみな家に帰しました」と涼しい顔で言う。作業に手抜きがなかったか確かめてみると、三治郎は詳細な手順を淀みなく話す。驚いたことには、年寄り農夫の助言を受け入れ、暗渠に緩やかな傾斜をつけて、排水の流れが良くなるように改良もしたという。

――この若者は算術や漢学にとどまらず、人使いも極めてうまい！

季忠は、要領よく段取りをして年上の農夫たちを使いこなした三治郎に、舌を巻いた。学者肌で、浜の生臭い生業を毛嫌いした父親とは似ても似つかわない才能を三治郎は持ち合わせている。

このことがあってから、季忠の考えに変化が生まれた。わざと口実をつくり、土地の改良事業を度々三治郎に任せてみたが、彼は工事の難易度や農夫の多寡に関係なく円滑に仕事を進める。

これまでは神保宗載と交わした約束、「行く行くは僧侶か医者に」という固定観念に縛られてきた。しかし、三治郎は学問の才にとどまらず、多くの人と交わり、人を動かすことが出来る。しかも算盤や算術も得意中の得意で、先が見通せない医師や学者になるより、商人や実業家に向いている。

――となると、数年前から気に留めてきた伊能家の婿探し、姪のミチの婿として、三治郎に優る者はいないのではないか……。伊能家の婿は三治郎、彼しかいない。

そう腹を決めた季忠は、策略を練りに練って慎重に工作に取り掛かった。

猫の手も借りたいほど忙しい田植が終わり、南中の村全

体が静かになったある朝、季忠は奥座敷に三治郎を呼び出した。
「お前は頭がいいし学問好きなので、行く行くは医者や学者にと思ってきたが、この冬の仕事ぶりを見て考えが変わったよ」
「えッ、一体なんのことですか？」
「お前は、商人にも向いていると思う。算盤も得意だからな」
「でも、私は学問の方が好きです」
「お前の気持ちはよく分かる。だがなぁ三治郎、お前の家は代々医者や学者ではないのだから、将来がまったく見通せない」
「幾ら努力しても、ですか？」
「駄目とは言わぬが、人に認められるまでには相当時間が掛かる。それまでは誰かが後ろ盾になってくれないとなぁ」
「はい」
「ワシはもう五十を過ぎた。あと幾らも生きられないであろう」
季忠の心中を察した三治郎は、唇を噛んで下を向く。季忠はその姿を痛々しく思ったが、佐原村の商家、伊能家が婿養子を探していることを切り出した。そして、伊能家は妹タミの婚家であり、跡取り娘のミチは自分の娘のようにこの家で育てた姪であること。さらには、伊能家が佐原村を代表する商家でありながら、主がいない状況が長く続き、将来が危ぶまれる、その伊能家を立て直し発展させることが出来るのはお前しかいない、と事実をありのままに伝えた。そして、「この年寄りからお願いする、ミチの婿になって伊能家を盛り立ててくれぬか」と畳に両手をついた。
突然、季忠に頭を下げられて三治郎は狼狽えた。「どうぞ頭をお上げに……」と言い掛けたが言葉にはならない。正座した膝を拳で押さえて俯いていたが、キッと顔を上げて答えた。
「そのようなことを私の一存では決めかねます。これから小堤村に帰って、父と相談します」
「そうだな、よく相談してきなさい」
季忠はいたわりを込めた声を掛けて、三治郎を親元に送り出した。

季忠は、三治郎に話をする前に、先手を打って小堤村の神保家を訪ねていた。本家の宗載と、分家して私塾を開く三治郎の父 貞恒とに会い、三治郎の伊能家への婿入り話を持ち掛ける。二人から婿入りの同意を取り付けると、矢継ぎ早に「ついては三治郎を平山家の養子に」と頼み込んだ。季忠は伊能家一族の婿養子に対する高望みを度重なる失敗でよく知っていたのである。

神保家は先祖が坂田藩に仕える武家の出で、小堤村の名主である。家格は決して伊能家に劣るものではなかったが、三治郎の父 貞恒は次男、その上婿入りした小関家から離縁された出戻りの身である。そのような親では伊能家から「家格が違う」と断られるのは明白であった。そこで、季忠は三治郎を平山家の養子にすることを思いつく。数年前から平山家に住み込んでいる三治郎を養子にすることはごく自然なことであり、三治郎の将来を季忠に託した宗載たちに異論を挟む余地はなかった。

さらに季忠は、三治郎に箔を付けさせるため、湯島聖堂にも手を廻した。大学頭の鳳谷に諱（本名）の名付け親になって貰えないかと頼み込む。

「鳳谷先生、この若者はご存じのように算術に長け、その上、人使いも巧みです。そこで佐原村の商家 伊能家の婿養子にと話を進めているところです。つきましては名家の主に相応しい諱を頂戴したいと存じます」

「そうか、大きな商家の主ともなれば以後、ここに来ることも叶うまい。誠に残念ではあるが、見方を変えれば目出度い話ではないか」

そして、それから一ヶ月ほどが経ったとき、鳳谷から餞（はなむけ）にと授かった諱が『忠敬』であった。

季忠は念には念を入れて、伊能家で暮すミチのところにも手を回した。亡夫 景茂の一周忌の後に、彼は何人もの候補者を探して婿養子に薦めてきた。しかし、伊能家の一族は何かと難癖をつけて断ってくる。ミチが再婚に乗り気ではなかったこともあるであろうが、どうやら親族ではない者を本家に入れることを嫌っている節がある。

そこで彼は、ミチに宛てて長い手紙を認めた。

――先ず婿になる三治郎の人となりについて、出自は季忠の祖母が嫁いできた神保家の血筋を引くもので、歳は若いがこれ以上優れた資質を持つ男はいないこと。次に家格を気にする伊能家の親族に対しては、三治郎を平山家の養子に迎え入れ、名も湯島聖堂の大学頭から忠敬と付けて貰ったこと。残る問題は、婿を迎えるミチ自身の考えや態度である。このままでは一生未亡人で過ごすことになるがミチはそれでもいいのか。伊能本家の経営も親戚任せにしておいては衰退の一途を辿る恐れもあるであろう。

そのような状況を打破するためには婿養子を取ることが一番であり、跡取り娘のミチ自身が強く出る必要があること。かつて母のタミを守ったときのように、親戚一同に「私は婿を取りたい、再婚したい」という意志をはっきり示すこと……。

二十日余りが経って、佐原村からミチの返書が届いた。伯父の季忠を信じて、すべてをお任せいたします。周囲からはまた無作法者と言われそうですが、縁談の話があったときには伯父上がおっしゃる通りに振舞います……と。

ミチの意向を確かめると、季忠は佐原村の豊秋に宛てて筆を執った。九月下旬、取入れがすべて終わり黄金色であった稲田が黒一色に変わった頃のことである。彼は、三治郎の出自と経歴、商家の当主に相応しい卓越した資質があり、家格については平山家の養子であり、忠敬と言う名は湯島聖堂の大学頭から授かったものであることをしっかり認めた。

二度、三度書状のやり取りがあって、十一月下旬にようやく三治郎の縁組が纏まった。待ちに待った吉報を受け、季忠はすぐさま佐原村に向かった。数棟の酒蔵に囲まれた伊能家の母屋では分家の平右衛門と名乗る男が「養子仲人」となって、婚礼の日程が協議される。その結果、三治郎とミチの結婚式は十二月八日（新暦一月二十一日）と決まった。

その日は雲一つなく、空は澄み渡っていた。婿入りの支度を調えた三治郎は、仮親になった季忠と小堤村からやってきた従兄の利八（神保本家の倅 幸宗）とに付き添われて門を出る。伊能家からは九兵衛という手代が南中村まで

迎えに来ていた。

一行は、荷物を担いだ人夫数名を従えて日本寺の門前を通り抜けて緩やかな坂道を下る。陣屋を左手に見て多古の町を過ぎると、そこから先は低い山と田圃に挟まれた一筋道、その細い街道をひたすら北に向かった。

一時半（三時間）ほどで中継点の岩部新田（現在の栗源町）に着いた。そこで待ち受けていた伊能家の人夫に荷物を引き渡して、平山家の人夫たちには祝儀を渡して、南中村に帰した。

再び歩き始めた一行は坂道を登り、佐倉七牧の東端に位置する『油田牧』の木戸を通り抜けた。この牧は、戦国時代に千葉氏によって造られ、その後、幕府に引き継がれたもので、森林の多い草地の所々に野馬が群れている。一時ほどで北側の木戸に差し掛かり、平坦な大地をさらに進むと長い下り坂になる。佐原村は、その坂道を降りた先であった。

小野川に面した伊能家の屋敷では、母屋に親戚一同が集まり、三治郎たちの到着を待っていた。五里（二〇km）の道のりを歩いてきた三人は草鞋を脱ぎ、用意された盥の湯で足を洗う。そして葛籠から取り出した羽織袴に着替えて足袋を履いた。

祝言の支度が調うと、三治郎たちは九兵衛の後について奥座敷に入った。床の間を背にミチが白無垢姿、絹の練帽子に紅裏白綸子の内掛け、白帯で手に扇子を持って座っている。三治郎は眩しい花嫁に瞬きをしながらおずおずとミチの横に座る。その脇を仲人役の季忠が固めて、婚礼が始まった。冬の日は短く、三々九度の盃を交わす頃には夕闇が迫り、奥座敷には蝋燭の火が煌々と灯された。

翌日は披露宴で、本宿と新宿各町の名主や村の重鎮たちが集まってきた。その席で、仲人役の季忠は婿養子の三

治郎を紹介する。

「この度、当家の伊能達（みち）と祝言を挙げて、三郎右衛門を継ぐことになった平山忠敬でございます。姓は私の養子ですので平山でありますが、忠敬という名は幕府学問所の大学頭、林鳳谷先生より頂戴致しました。ご覧の通り歳も若く、商売の経験はありませんが、算盤をはじめ人並みならぬ資質を持った若者でございます。本人も好きな学問を捨てて家業に専念する覚悟でおりますので、ご参集の皆様には末永く、温かいご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます」

三治郎は、季忠のスピーチに合わせて頭を深々と下げる。そして、「これからは忠敬、名は忠敬」と心の中で何度も自分に言い聞かせた。

翌々日はミチと共に菩提寺の観福寺に出掛けた。婿入りの時、長い坂道を下って佐原入りしたが、その坂の終わり近くに菩提寺はあった。杉木立に囲まれた寺と先祖代々の墓をお参りして、その後は佐原村で伊能家と共に「ご両家」と呼ばれている永沢家をはじめ、主な商家や取引先に挨拶回りをした。

婚礼とそれに続く行事がすべて終わり、出入りする客も途絶えた。終始興奮していた先夫の遺児、五歳になる忠孝は夕食が済むとすぐに眠った。緊張から解き放された忠敬とミチは、初めて夫婦二人だけで向き合う。

「三治郎、ではなく忠敬と申します。末永くお頼み申します」

「こちらこそ。旦那様のことは伯父から沢山お聞きしています。和算をはじめ学問に長けているだけではなく、人使いも舌を巻くほどお見事とか」

「いや、学問はともかく、商家の仕事は経験したこともないので自信がありません」

「いいえ、伯父が太鼓判を押してくれたのですから、必ず旦那様にはできますよ」

「そうだと良いのですが……。ところで、ミチさんは南中村の平山家で育ったのですか？」

「はい。日本寺のすぐ近くにある伯父の家で。私の父は生れてすぐに亡くなったので、伯父は私にとって父親も同然

の方です」
「そうですか。私は小堤村の神保家に馴染めずに、ことある度に平山家に出入りしていました。だから季忠殿は、実の父のような存在です」
「ということは、私たちは兄妹みたいなものですね」
それまで硬かった二人の表情が、その一言で俄(にわ)かに軟らかくなった。
「伯父と一緒に湯島の聖堂に通って、学問をしていたと聞きますが」
「季忠殿に連れられて、偉い先生の講義を何度か聴いただけのことです」
「これからも、お続けになりますか？」
「いや、伊能家の婿になった以上、家業に専念します。林鳳谷先生からも諭されました。学問だけが人生ではない、人は夫々与えられた場で全力を尽くすのが道というものだと。そして、忠敬という立派な名を授かりましたから、名に恥じないように頑張ります」
「では、これからは二人で力を合わせて、この伊能家を盛り立ててゆきましょうね」
「はい、よろしくお願いします」
忠敬は四歳年上のミチに、幼時に死別した母に似た温もりを感じながら、伊能家の家業に全力を注ぐ決意を新たにした。

《以下、次号》

【参考資料と謝辞】
伊能忠敬が隠居後に全国をくまなく測量して歩き、日本地図を完成させた偉業は多くの人が知っている。しかし、彼の生立ちや何度も妻に先立たれた悲運については資料が乏しく、ほとんど知られていない。私はそのような生身の忠敬像に興味を抱き、常々小説に書きたいと思っていた。
そのような折に古書店で「新考 伊能忠敬」という本と出会った。著者は伊藤一男氏で崙書房出版から二〇〇〇年に出版されたものである。
伊藤氏は忠敬が育った下総の横芝光町で農業を営むか

たわら、「九十九里地域文化研究所」を主宰、数多くの地域史を出版している。氏は「新考 伊能忠敬」の中で地元ならではの詳しい資料を豊富に示して、これまでの忠敬像、ことに幼少時の境遇に多くの疑問を投げ掛けている。

私も忠敬が生まれ育った九十九里浜や栗山川流域、佐原と香取神宮などが好きで四季折々によく出掛ける。何故かは分からないが自然とハンドルがそちらに向くのである。

その慣れ親しんだ土地が舞台であることもあってか、伊藤氏の研究には「そうだ、そうに違いない」と頷かされることばかり。強い共感を抱いて、初めての歴史小説を執筆することになった。

まだ端緒についたばかりではあるが、この小説は伊藤一男氏の著書に出会わなければ書けなかったことを明記して、伊藤氏に深謝すると共に、貴重な郷土史の資料を提供いただいた香取市の図書館ならびに多古町の図書館に心より御礼申し上げる。

二〇一九年十二月　香取　淳

日女若

～ 市川新之丞の恋物語 ～

安達 真魚

水面に映る　浮かぶ藻の花
春招く光　手賀の浦
入り江の小舟　ひばりが歌う
どこまでも響き渡る　乙女の笑い声
やるせない想い　切ない想い
あこがれと果たすべきこと　もつれあう心
One more time for you　もう一度
あなたのために　できること

森の若葉　木洩れ日降り注ぐ
迫りくる駒音　延命寺
荒武者蹴散らして　守りぬきたい
傷つき疲れはてても　命尽きるまで
恋に焦がれて　悶え苦しむ
いとしさとなすべきこと　からみあう心

One more time for you　もう一度
あなたのために　できること

いま最後に　あなたの腕に抱かれて
幸せな自分が　ここにいます
そしていまここで　箕輪の人となって
あなたのあたたかな　愛を受けたい

カンナ街道

走り抜ける車　あてのない1日
たたずむ赤い花　日暮らし思い続ける
水辺に広がる　青いジュータン
もう桜の　季節忘れてる
手賀の裏里　カンナ街道
あの熱い想いは　どこへいくの

西日に向かって　続くアスファルト
サングラス越し　見える花街道
君との想い出　忘れないように
色あせないで　咲いてて欲しい
手賀の裏里　カンナ街道
君とならばいつか　分かり合えると

会うたびに変わる　君のその瞳
疑うことが　できなくて
手賀の裏里　カンナ街道
この胸のせつなさ　抱いて走る道
手賀の　裏里　カンナ街道
あの熱い想いは　どこへいくの

夢涯てるまで

冴え渡る星空　北斗の光
苦難と向き合い　歩き続ける
あなたから聞いた言葉　どこまでもいつまでも
私の心に　寄り添っている
It's the Mission.　Land Surveying.
涯てしない旅路　もう戻れない　いまは戻らない

描いた願望　思いたった覚悟
夕闇のなかで　輝きつづける

どこまでも続く　海岸線
海鳥が招く　白い砂浜
果たすべき我が務め　どこまでもいつまでも

私の胸を　突き動かしている
It's the Mission.　Land Surveying.
涯てしない旅路　もう戻れないいまは戻らない

思うふるさと　帰れないその日まで
いまここで　夢涯てるまで

運命の歯車　周り続けている
いまここで　夢涯てるまで

光に満たされて

与えられた命　さまよった命
ひとつだけの命　光に満たされて

嵐の中に　探し続けた
生きるための祈り　我が使命
広がる宇宙　その果てに
見えてくる　すべての真実の姿
短い生涯　稲妻のように
独りで生まれ　独りで去っていく

与えられた命　さまよった命
ひとつだけの命　光に満たされて

すべての人が　輝きだす
教え　導くこと　我が使命
正しい道は　そこにある
あなたがここで今　見ている道

迷い傷つき　絶望しても
幸せになる　命尽きるまで

ひらめく悟り　目の覚める悟り
迷い解ける悟り　真理を開くために

与えられた命　さまよった命
ひとつだけの命　光に満たされて

Y & Y

暖かな陽射し　光受ける山懐
親元を遠く離れ　ここまで来た
二人巡り合った　定められた奇跡
貧しさのなかで　わかりーあえた

大きな力受けて　ともに歩き出す
君のために生きる　君とともに生きる

里からのたより　風のなかに聞こえる
この想い遠くまで　届くように
二人くらし重ねた　新しい旅立ち
めばえたこの命　愛すべき宝もの

哀しみどれほど　降りかかっても
励み動き続けた　途ぎれもなく

守るべき強い絆　時は移ろっても
皆のために生きる　皆とともに生きる

遥かな思い出　夢のなかに消えていく
この祈り遠くまで　届くように

哀しみの向こう側

歩いてごらん　笑ってごらん
さあ立ち上がって　おしゃべりしてごらん
この世に生まれ　みんなに囲まれ
君は生まれてきた　幸せになるために
いつか心病んで　いつか辛くてなっても
哀しみの向こう側に　微笑みがある

Because　それは命　Because　たった一つの
たった一つの　君の命だから

飛んでごらん　泣いてごらん
さあ立ち止まって　いい顔見せてごらん
生まれきてくれて　ほんとにありがとう
君には君の　未来がある
いつかむなしくなって　いつか誇り失っても
哀しみの向こう側に　微笑みがある

Because　それは命　Because　たった一つの
たった一つの　君の命だから
Because　それは命　Because　たった一つの
Because　(Woo)　Because　(Woo)

あとがき

筆者は、この数年趣味で歌入りの曲を作って楽しんでいるが、現在制作中の曲のいくつかについて、それらの詩を載せていただいた。制作している曲の曲調はポップスを基調にしているつもりなのだが、どうしてもフォーク調になることが多く、ロック調の曲を目指して日々努力している。しかし、世代間のギャップはなかなか埋めることができず、カラオケで子や孫が歌っている曲などにはついていけない状況は変わらないでいる。そんななかで例えば最近脚光をあびている「あいみょん」の曲などを聴くと、まだ若いのにアコースティックをベースにしているので、違和感なく受け入れることができる中高年者も多いのではないだろうか。昔から音楽のジャンルは幅広いが、ポップス一つだけでも多様化の一途である。

詩の内容などについては、本誌にあっているのかどうかよくわかっていない。本誌がジャンルを広げているということなのでご了承いただきたい。曲ありの詩は、当然、詩の書き方や構成は違うので、違和感があるかもしれない。

このような作品を作っている人はそのテーマを何にするか、いつも皆さん苦労しているのではないかと想像する。自分の場合もそこが一番肝心なところだと心得ている。しかし、いつも愛だとか恋だとかでは面白くないので、安直に歴史とか地域とかにテーマを求めているのが実情である。

【編集後記】

●前回の『灰田 隆平』に引き続き、『安達 真魚』が新たに会員に加わった。安達はキーボードを演奏しながら歌うシンガーソングライターで、オリジナル曲を「kiyo」の名で配信するユーチューバーでもある。手始めに数編の詩を発表しているが、これらは新たな楽曲の歌詞であるという。

●中川とらの連載「そよのバアバの空中サロン」が第八回で完結した。『和音』という少女が、一人暮らしの祖母『そよの』を訪ねて交流するオムニバス風な作品。思春期の少女の瑞々しい感性を詩的な文章で描いていて好感が持てる。

●畑中康郎の「死線」は秩父の両神山で滑落事故に遭い、生死の狭間を彷徨う男の話である。死に瀕した人間の心理描写が卓越していて読者を引き付ける。リアリティな表現を身に着けた著者の次作が待たれる。

●香取淳の「伊能忠敬と四人の妻」は、謎の多い忠敬の幼少期と伊能家に婿入りするまでを想像たくましく描いている。あくまでもフィクションであるが、忠敬を巡る幾つもの疑問の答えになっているかも知れない。

●長いあいだ挿絵を担当してきた『高橋より』が今回をもって退会することとなった。著者の意向を汲み取って、見事な挿絵を描いてくれた女史に感謝し、心より御礼申し上げる。

〈香取 記〉

【会員と連絡先】

安達 真魚　kiyonori.s@gmail.com

いんば 華子　bach.goldberg-variationen@hotmail.com

香取 淳　katorijun27@gmail.com

唐瀬 光　effect_fact_mouth_karase_4118@yahoo.co.jp

中川 とら　nakagawatora1@gmail.com

灰田 隆平　g2b2taka@gmail.com〉,

畑中 康郎　ktakasug@am.em-net.ne.jp

高橋 より（イラスト）junko328p@softbank.ne.jp

草の丘　第一七号

発行　二〇一九年 十二月二〇日

編集兼発行人　印旛文学の会　香取 淳

連絡先(携帯)とメール　080-5533-1002

katorijun27@gmail.com

ＵＲＬ　http//bungeikusano-oka.raindrop.jp